

ウチと彼と深層心理

mOS

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本作は投稿主が美波×明久の関係が好きで妄想の限りを尽くした二次小説であり、『バカとウチと本当の気持ち』の後の物語になります。

前作の続きの位置付けになりますので、まずは前作からご覧ください。

今回も内容は美波と明久の恋物語です。瑞希派の方や雄二たちとのドタバタ、試召戦争ネタをお探しの方はごめんなさい。

それと、前作にも増して美波が素直になっていて、かなりデレると思います。

こんなの美波じゃない！と思われるかもしれませんが、あくまでもifの物語としてご覧いただくようお願いいたします。

また、前作もそうでしたが、原作9・5巻までの流れに沿っている部分が多いため原作を読んでからご覧になることをお勧めします。

目次

p a r t	【後編】	p a r t	p a r t	p a r t	p a r t	p a r t	p a r t	p a r t	p a r t	【前編】
A		I	H	G	F	E	D	C	B	A
79		69	60	53	47	39	30	22	11	1

p a r t	p a r t	p a r t	p a r t	p a r t	p a r t	p a r t	p a r t	p a r t	p a r t
J	I	H	G	F	E	D	C	B	
170	158	147	132	122	110	102	91	84	

【前編】

part A

「ごめん美波！ お待たせ！」

「遅い！ 先に帰ろうかと思つたわよ！」

「ホントごめん！ 鉄人に捕まっちゃつてさ」

「まったく。毎回毎回よく捕まるわね」

「ホント、なんで僕ばかり……」

「アンタが答案に変な答えばかり書くからでしょうがっ！」

「ええっ!? 僕、真面目に答えてるつもりなんだけど!？」

「はあ……まあいいわ。帰りましょう」

校門で三十分くらい待つただろうか。

補習から解放されたアキが校舎から走つて出てきた。

そう。ウチはこのアキを待つていた。

それはもちろん一緒に帰るため。

あれから一ヶ月。

ウチとアキは付き合っている。

一ヶ月前のあの日、アキはウチの想いに応えてくれた。

その時にアキといくつかの約束をした。

『毎日一緒に帰る』という約束もそのうちのひとつ。

あの時の約束通り、アキはこうして毎日ウチを家まで送ってくれている。

今日は課題の回答について西村先生に絞られていたみたい。

もうすぐ期末テストだって言うのに大丈夫なのか。

横を歩いているアキに視線を送ってみると、口元を緩めていてなんだか楽しそうにしている。

先生に叱られても全然気にしてないみたい。

ちよつとは気にしてほしいんだけどな……。

そう思ったものの、アキの楽しそうな顔を見ていたらそんなことを言う気も失せてしまった。

ウチらは他愛のない話しに花を咲かせながら、帰りの道をゆつくりと歩いた。

空はもう暗くなりかけている。

でも急いで帰る気にはならなかった。

付き合いはじめの頃、ウチは一緒に歩いていてアキとの歩幅が合わず、小走りになるようなこともあった。

それが、いつの間にか歩幅を気にしないで歩けるようになっていた。

それに気付いた時、ウチはアキの速度に慣れたんだと思った。

でもそれは違った。

気付いた翌日、注意して見ていたら、明らかにアキが歩く速度を落としていた。

ウチが慣れたんじゃないやなかった。アキが合わせてくれていた。

アキは今もこうしてウチに合わせてゆつくりと歩いてくれている。

こうしたアキの気遣いにウチは幸せを感じている。

商店街に差しかけた辺りだろうか。アキが買い物をしたと言い出した。

「美波、ちよつとスーパーに寄って行きたいんだけど、いいかな？」

見ると、アキはさっきの楽しそうな顔をより一層、楽しそうに輝かせている。

とつても無邪気な、少年のような笑顔。

なんて嬉しそうな顔してるのよ……。

「いいわよ。ウチも卵を買っておきたかったし」

まあ反対する理由は無いものね。

それにお弁当用の卵も買い足しておきたかったし。

でも相変わらず料理はアキの役目みたい。

やっぱり玲さんは料理しないのかな。アキも大変ね。



いつものスーパーの入り口に付くと、アキは慣れた手つきで買い物用カートを引き出した。

そして鼻歌混じりに店内へと入って行く。

こういう時のアキって活き活きしてるのよね。

きっとこういうのが好きなんだろうな。

前に聞いたら否定していたけど、こういう姿を見ているとそうとしか思えないのよね。

「美波どうしたの？ 行こうよ」

「うん」

眺めてる場合じゃないわね。

ウチも入ろう。

店内に入ると、アキはメモを見ながら見慣れない食材をカートに入れていった。いつになく真面目な顔をして、食材ひとつひとつをよく吟味している。

ずいぶん気合いが入ってるのね。

ウチはそんなアキを後ろから眺めながら卵のパックをひとつ取り、カートに入れた。会計は別なのに、何故こうしたのか自分でも分からない。

でもこの時は一緒に入れることに何の疑問も持たなかった。

アキはこの後も次々と食材をカートに入れていった。

その半分くらいがウチも使ったことのない食材。

何を作るつもりなのか。

「よし、これで全部かな。美波はもういいの?」

「うん。ウチはこれだけよ」

「オツケー。それじゃレジに行こう」

アキはレジヘカートを押して行き、ウチもその後を付いて歩いた。

……

何度かアキとこうして一緒に買い物してるけど……。

やっぱりこの時間はとつても幸せ。

こうしてアキが手の届く距離にいるのが嬉しい。

将来、毎日こんな風に過ごせたらいいな。

将来かあ。

アキは将来どんな仕事をするのかな。

ウチのお父さんみたいな仕事には就いてほしくないな。

だつてあんな仕事じゃぜんぜん一緒にいられないもの。

でもアキの成績じゃ無理だし、きっとそんな心配は無用ね。

それ以前にこのままじゃ進級できるかも怪しいし……。

今度のテストは頑張つてもらわないといけないわね。

「1728円になります」

あ……。

気付いたらレジの順番が来ていて、もう打ち終わっていた。

「あつ、卵は——」

ウチが言いかけた時には既にアキがお金を出していた。

一緒に払ってくれたのね。

お店を出たら代金渡さなくちや。

レジを終えたウチらは食材を袋に詰め、店を後にした。

「アキ、卵の代金払うわ。いくら？」

「いいよ。今日は僕が言い出したんだから僕のおごりさ」

「え？ そうは行かないわよ」

「いいからいいから。割引券を使ったから値段分かんないし。はい卵」

「う、うん……」

「さ、帰ろう」

ホントにいいのかな。

アキだつて欲しいゲームとかあるんじゃないのかな……。

ウチは悩みながらも渋々、袋を受け取った。

アキの補習が終わるのを待っていたから、学校を出た時は日が沈みかけていた。

店に入る前はまだ明るかったけど、買い物を終えて出て来た時にはもう真つ暗だつた。

道の両脇では街灯が灯り、辺りを明るく照らしている。

去年の冬は街灯があつてもやっぱり夜道を歩くのは恐かつた。

でも今年はアキと一緒にいてくれる。

このことがウチに恐さと寒さを忘れさせてくれる。

ウチは横にアキの存在を感じながら街灯の灯の下を歩いた。

「それ、珍しい食材ね」

「うん。ちよつと研究しててね」

「そうなんだ。勉強もそれくらい熱心だといいいのね」

「うっ……ほ、ほつといてよっ！」

「ほつとけないわよ。これからも毎日ウチを校門で待たせるつもり？」

「うぐっ……。ごめんなさい……」

「分かればいいのよ。それに勉強ならまたウチが教えてあげるわ」

「数学だけね」

「いいじゃない！ 教えてもらえるだけ有り難く思いなさい！ そんなこと言うなら教

えてあげないわよ！」

「あははごめんごめん。冗談だよ」

まったく……。

でも最近、アキに余裕が出てきたみたいね。

ウチの方がからかわれている気がするわ。

主導権を取り戻さないといけないわね。

そんなやり取りをしながら、ウチらは家の前まで来ていた。

「それじゃ美波、僕はこれで」

「あ、うん……」

「ん？ どうかした？」

やっぱり別れ際は切なくなる。

もつと一緒にいたいけど……。

「……ううん。なんでもない。おやすみアキ」

「うん。おやすみ」

あんまりわがままを言うわけにもいかないわ。

☆

「ただいま」

「お姉ちゃん、お帰りなさいですっ」

「ごめんね葉月、遅くなっちゃった。すぐご飯作るからね」

「はいですっ！ 葉月も手伝うです！」

「ありがと。じゃあお姉ちゃん着替えて来るから、これ冷蔵庫に入れておいてくれる？」
「はいですっ」

家に帰ればウチはお母さんの代わり。

もう慣れたけど……。

もうちよつと自分の時間がほしいな……。

part B

今日は土曜日。

忙しいお父さんとお母さんは今日も仕事に行っている。

だから家事全般はウチの仕事。

その仕事は意外に多く、朝食の後片付けと洗濯、それに家の掃除で時間が過ぎて行く。

これらが終わるのは午後には差しかかる頃。

それからやつと自分の時間になる。

家の仕事を終えたウチは今、自分の部屋で机に向かっている。

今日は授業も補習も無いけど、葉月が家にいる。

だから家を空けるわけにもいかず、こうして自分の部屋で勉強をしている。

まだ慣れない文字との格闘は疲れる。

凝り固まった体を反らせて伸びをすると、澄ました顔をした狐のぬいぐるみが視界に

入った。

アキの写真を大事に抱えた狐のノインは机の横で静かに座している。

あれから一ヶ月が経つ。

ウチは今、とつても幸せ。

一年半想い続けたアキと恋人の関係になれた。

アキはあれからウチにとつても優しくなった。

あの時交わした約束も守ってくれている。

教室の席も隣にしてくれた。

お弁当も毎日交替で作っている。

ただ、毎日一緒に帰るといふ約束は難しいと思っていた。

それはアキの補習室送りが無くなるとは思っていなかったから。

案の定、一カ月経った今もアキは相変わらず補習室に連れて行かれている。

だからある時、アキに『補習でどうしても遅くなる時はいい』と伝えた。

それでもアキは『約束だから』と言ってウチを待たせ、大急ぎで補習を終わらせてくる。

多分あの時の約束をずっと気にしているんだと思う。

確かに『絶対だからね』って言ったけど……。

ホントこういうところだけはバカが付くくらい真面目なんだから。

でもウチはアキのこんなところを信頼している。

それから、アキは帰りにウチの家によく寄って行くようになった。

葉月ともよく遊んでくれるようになった。

相変わらず葉月はアキのことを『お嬢さん』なんて言ってる。

アキはその度に苦笑いをしているけど、いくら葉月でもアキだけは譲れないわ。いつかちゃんと言って聞かせないといけないわね。

でもアキは大きく変わったわけじゃない。

変わったのはウチへの接し方くらいで、むしろほとんどが今まで通り。

アキは行動する時はいつも皆と一緒に。

付き合いはじめからそれもそれは変わらなかった。

遊ぶ時も、勉強する時も瑞希や坂本たちも一緒に。

最初は寂しかった。

もつとアキと二人の時間が欲しかった。

でもウチとの時間が増えれば比例して皆との時間が減る。

アキは皆との関係を変えたくなかったんだと思う。

一緒に過ごして来たFクラスの皆との関係を。

瑞希との関係も……。

アキはこのことを口にはしないけど、皆との接し方を見ていて分かった。

だからウチは寂しさを我慢することにした。

アキの気持ちは分かるから。

でも……。

やっぱり寂しい……。

念願叶って恋人同士になれたのに、想像していたよりも一緒にいられる時間が少ない。

アキが皆との時間を大切にしていることに加えて、ウチは帰って家事をやらなくてはならない。

土曜は補習があることも多く、空いているのは日曜くらい。

仕方のないことだけど……。

もつとアキと二人の時間がほしいな……。

「お姉ちゃん！」

「ひゃっ!？」

「お姉ちゃん？ どうしたですか？」

あ……葉月？

びっくりした……。

「葉月、ダメじゃない。部屋に入る時はノックしなきゃ」

「何度もノックしたですよ？　でもお姉ちゃんいるのにお返事ないから入っちゃいました」

「あれ……？　ご、ごめんね。ちよつと考え事してたから……」

ノックの音なんてぜんぜん聞こえてなかったわ。

そういえば勉強してたはずなのに、いつの間にかアキのこと考えてたわ……。

「それで葉月、どうしたの？」

「あ、さつきお母さんからお電話があつたです。今日はもうすぐ帰れるって言つてました」

「そうなんだ。珍しいわね。分かつたわ」

「それじゃ、葉月はお母さんのためにお茶の準備をします！」

「ありがとう葉月。火傷しないように気を付けるのよ」

「はいですっ！」

そっか。お母さんももうすぐ帰ってくるのね。

それなら今日はアキとどこかに行きたいな。

映画？　シヨツピング？

うん……。

でもアキのお財布にあんまり負担を掛けるわけにはいかないわね。

ウチだつてそんなにお金に余裕があるわけじゃないし……。

そうだ。それなら大きな公園でのんびり散歩なんてのもいいわね。

恋人らしく腕を組んで……ね。

……

恋人らしく……か。

あれからアキ言つてくれないな……『好き』つて。

どうしてかな……。

ウチのこと好きじゃなくなったのかな……。

……

ううん。そんなことないよね？

アキの態度からはウチを大切にしてくれてるのがよく伝わってくるし。

それにこの前読んだ雑誌。

あれには男はそういうことを軽々しく口にしないものなんだつて書いてあつた。

きつとアキもそうなのよね。

でもやっぱり聞きたいな……アキの口から……。

そう……。

耳元で愛を囁いて……。

熱い口付けを交わして……。

それで……。

つて！ ウチ何考えてるんだろう！

P r r r r r

「きゃっ!!」

あ……携帯……？ びっくりした……。

えっ！ ア、アキから!?

ど、どうしよう！

ウチったら変なこと考えてて顔真つ赤なんじゃ……!?

……電話なんだから顔が見えるわけないじゃない。

何を慌ててるんだろう……。

P r r r r r

あっ！ 早く取らなきゃ！

「アキ？ あ、うん。大丈夫」

「今日？ 空いてるわよ？ ちようどアキとどこか行きたいなって思ってたところ」

「料理の新作？ ふ〜ん……：新作品評会ってところね」

「え？ 辛いもの？ ウチはぜんぜん平気よ？」

「うん。アキの家に行けばいいの？ うん、分かった。じゃあ今から行くね」

P i

やった！ アキが誘ってくれた！

今日はアキと一緒に過ごせるのね！

あ……。

料理の試食つてことは皆も呼んでるのかな。

きつとそうよね……アキのことだから。

……

それでもいいっ！ アキと一緒に時間ができるのなら！

でも料理の評価つてどうやるのかな。

料理対決番組みたいに何人かで試食して、十点満点で点数を付けるって感じ？

だとすると坂本や土屋は採点厳しそうね。

瑞希は優しいからどんなものでも十点付けそう。

ウチは……アキの料理ならなんでもおいしく感じちやうかな。

えへへ……。

あつ！ こんなことしてる場合じゃなかった！

準備しなきゃ！

ウチは手早く着替えを済ませ、ポシエツトを肩に掛けた。

胸元を飾るのはもちろんウチの宝物。リボンを象ったネックレス。

準備よし。

あ……そうだ。葉月をどうしよう。

アキのところに行くって言ったら、きつと一緒に行きたがるでしょうね。

どうしようかな……。

あの子、辛いものは苦手なのよね。

連れて行ったらアキのことだから葉月に気を遣うだろうし……。

やっぱり今日はお留守番してもらおう。

お母さんもすぐ帰ってくると思うし。

ウチは葉月の部屋に行き、声を掛けた。

「葉月、お姉ちゃんちよつと出掛けてくるから、お母さんが帰ってくるまでお留守番お願いね」

「お姉ちゃん、またバカなお兄ちゃんのところですか？ 葉月も行きたいですつ！」

どうして分かったのかしら……。

どうしよう……何か言い訳付けなくちゃ。

アキの手料理食べに行くなんて言ったら絶対ついて行くつて言うだろうし……。

……うん。やっぱりこれね。

「それはほら、今日はクラスの皆と勉強会なのよ。テストも近いし。だから行つてもつまらないわよ？」

「むー。でもこの前そう言つてお出掛けしたお姉ちゃん、とつても楽しそうなお顔で帰つてきました。ホントはバカなお兄ちゃんと遊んで来たんじゃないですか？」

この子鋭いわね……。

「そ、そんなことないわよ！ アキを教えるのつてとつても大変なんだから！」

「やっぱりバカなお兄ちゃんのところなんですネ？」

あつ……。

「じゃー！ 葉月お願いね！」

「あつ！ お姉ちゃん！ ずるいです……」

ウチは葉月を振り切って家を出た。

ごめんね葉月。

今度アキを連れて来るから今日は許してね。

part C

アキの家に到着したウチはリビングに案内された。

そのリビングには誰もいなくて、小さめのテーブルがひとつだけ置かれていた。

ウチが一番乗りなのかな。

「坂本たちはまだ来てないの？」

「ああ、雄二たちは呼んでないんだ」

「えっ？ そうなの？」

「うん。まず美波に食べてもらいたくてさ」

「ウチに……？」

「うん。皆も呼んだ方が良かった？」

「う、ううん！ そういうわけじゃないんだけど……」

「そっか。よかった」

ウチはてつきり皆も呼んでいると思っていた。

今までこういう時は決まって坂本たちが一緒だった。

こんな風にウチだけが呼ばれるなんて、今までの記憶には無い。

だから正直驚いた。

驚いたけど、それ以上に嬉しさが込み上げてくる。

アキと二人だけの時間。

こんなのはホント久しぶり。

あ、でも今日は土曜だし、玲さんがいるのかな。

「それじゃ、もうすぐできるからその辺でくつろいでよ」

「うん」

ウチはソファでアキの料理を待たせてもらった。

玲さんは仕事で出掛けているみたい。

ウチの両親と同じで忙しいのね。

そういうえばアキは玲さんにウチらが付き合ってること言ったのかな？

いつも『不純異性交遊は禁止』なんて言ってたけど、

ウチらは不純な付き合いじゃないから玲さんも反対しないはずよね。

もしアキが言っていないならウチが言っちゃおうかな。ふふ……

えっ——？

玲さんがいないってことはアキの家で二人つきり!?

まさかアキ、それを意識してウチだけを呼んだの!?

も、もしかして——！

……ダメダメ！　ウチつたら何考えてるのよ！

「美波、お待たせ。……どうかした？」

「あ……ううん！　なんでもない！」

「大丈夫？　顔が赤いみたいだけど……」

えっ？　ウチ、顔が赤いの？

へ、変なこと考えてるからよね……。

「そ、そう？　走ってきたからかしら？」

ウチは適当な言い訳をつけて誤魔化してみた。

と言つても、嬉しくて駆け足になってしまったのは事実。だから嘘はついていない。

でもアキはそんなウチを訝しげに見つめている。

とにかく落ち着かなくちや……。

ウチは目を瞑り、大きく息を吸って深呼吸をしようとした。

びとっ

息を吸って止めた時、額ひたいに何かが当てられた感触があった。

？

不思議に思つて目を開けると、目の前は暗くて……。

と言うか……目の前にアキの^{まぶた}瞼があつた。

「つ——!？」

ウチは驚きで声の無い叫びを上げ、ソファの上で跳び退いた。その勢いでウチは背もたれにまで登つていた。

ま、まさかアキ——!!

「熱は無いみたいだね」

えっ……？ あ、そつか。熱を計ろうとしたのね。

び、びつくりした……急に額を合わせてくるんだもの……。

ウチは背もたれから降りてソファに座り直した。

でもアキ、本当によくウチを見てくれるようになったな。

今みたいにウチの表情にも気付いてくれるし。

見当違いな反応が多いけどね。

それでも一生懸命に考えてくれるのは嬉しいな……。

「大丈夫よ。ホントになんでもないから」

「ホントに？」

「どうしてそんなに心配するのよ。ウチってそんなに信用無い？」

「だって美波は自分のことを考えずに行動することがあるだろう？　だから心配なんだよ」

「えっ……？　い、今なんて言ったの？」

ウチの耳がおかしくなったのかしら。

信じられない言葉が聞こえた気がする。

「美波は無茶をすることがあるから心配だって言ったんだけど……。なんかおかしかった？」

……

呆れた。

アキの口からこんな言葉が出てくるとは思わなかったわ。

こういうのを『自分のことを棚上げる』って言うのよね。

確かに気付いたら無茶をしたこともあるけど、アキほどじゃないわ。

「心配してくれてありがと。でもね、アンタにだけは言われたくないわよ？」

「ほえ？　なんで？」

「アンタ自覚無いの!？」

「自覚？　なんの？」

「今アンタが言った言葉、自分に当てはめてみなさいよ」

「僕に？ んー……う？」

アキは腕組みをして目を閉じ、思考状態に入った。

そんなに考えることかしら……。

ウチは黙ってアキが考えるのを待った。

「……………」

「？」

しばらくして目を開けたアキは眉をひそめて、とつても間の抜けた顔を見せた。

分からないのね……。

「はあ……。まあいいわ。アキだものね」

「うん？」

「ふふ……なんでもないっ。ねえ新作貰っていい？ お昼食べて来なかったからお腹す

いちゃった」

「あ、そうだった」

ウチはテーブルに案内されて席に座った。

「さ、どうぞ召し上がれ」

「いただきます」

☆

アキの新作はとってもおいしかった。

点数を付けるとしたら文句なしの十点ね。

お店に出してもいいくらい。

材料には昨日の帰りに買った食材が使われているみたい。

あの買い物はこのためだったのね。

この辛さは山椒かな？

葉月でも食べられなくはないけど、おいしいとは言わないでしょうね。

連れて来なくて正解だったわ。

でもお父さんとお母さんには喜んでもらえそう。

ウチも作ってあげたいな。

どうやって作るんだろう。

「ねえアキ、これのレシピ教えてくれない？」

「ん？ それは教えられないなあ」

「なんでよ。いいじゃない。減るものでもなし」

「だってさ……。教えたなら美波の方がおいしく作れそうだからさ……」

「え……う？」

何を言っているのかしら。

ウチよりずっと料理上手いくせに。

どうしてそんなに劣等感持つてるのかしら。

でも今は教えてくれそうにないわね。

まあいいわ。後で聞き出してやろうと。

アキのことだからちよつと揺さぶりをかければ口を滑らせるだろうし。

part D

新作料理の評価を終えたウチらは部屋を変えた。

今はアキの部屋でお茶をしながらおしゃべり。

やっぱりアキと一緒に時間は楽しい。

それと、やっぱりアキは単純。

話しているうちにちよつと話題を振ったら、さっきのレシピをあつさり話してくれ
た。

途中で気付いたみたいで最後まで教えてくれなかったのが残念だけど。

まあちよつと時間を置いて話せばきつと続きを教えてくれるだろうし、今日はこれく
らいにしておいてあげようかな。

そんな会話の切れ目でお茶を口に運んだ時、ウチはふと棚にあるゲーム機に目が行つ
た。

それはウチの部屋には無い物。

アキや坂本たち男子が好きな遊び道具。

そういえば前回来た時はいつの間にか格闘ゲーム大会になってたっけ。

勉強会だったはずなのにね。

確かあの時は坂本の優勝だったかな。

強引にウチと瑞希も参加させられたけど、あつと言う間にアキと土屋に負けちゃつて。

あの後、悔しくて何度もアキに勝負を挑んだけど……結局一回も勝てなかったな。なんだか思い出したらまた悔しくなってきたわ……。

……

よしっ！ 今日こそ見返してやるわ！

「アキ、この前のあのゲームで勝負よ！」

「ん？ ああ、前に勉強会した時のあれ？」

「そうよ。今日こそ勝ってみせるわ」

「まだ懲りてなかったんだね。しょうがないなあ。この僕が直々に相手をしてあげよう」

「その天狗の鼻、へし折ってあげるわ！」

アキはゲームをテレビに接続するとウチの横に座った。

ウチは前回の戦いを思い出しながらコントローラーを握り、画面に集中した。

一方、アキは肩の力を抜いて、とつてもリラックスしている。

「随分と余裕じゃない」

「そりやそうさ。このゲームは相当やり込んでるからね。負ける要素は無いよ」

「大した自信ね。でもウチだつて負けてばかりじゃないんだからね！」

「それじゃ、お手並み拝見と行きますか」

ウチは打撃や投げを得意とする女の子のキャラクターを選んだ。

アキは遠距離攻撃型のキャラクターを選んでいる。

「またそのキャラ？ それじゃ僕には勝てないよ？」

「いいのっ！ ウチはこの子が好きなんだから！」

この子、動きが機敏で扱いやすいのよね。

それに何か妙な親近感を覚えるし。

確かにこの子は遠距離攻撃には弱い。

でも戦い方によつてはこの子だつて勝てるはずよ。

だつて前回、土屋がこの子を使ってアキに勝つていたもの。

あの土屋のやり方を真似すればウチにだつて勝てるはずよ！

さあ勝負開始！

☆

と、意気込んで勝負をはじめたものの、やっぱりウチは勝てなかった。

「ちよつとアキ！ 少しは手加減しなさいよ！ ウチは初心者なのよ！」

「へへへそうは行かないよ」

「むっつ！ もういいっ！ なんとしても勝つてやるんだから！」

「ふふん。雄二と特訓を繰り返してきた僕に勝てるかな？」

確かにアキは大きなことを言うだけはあった。

ぜんぜん歯が立たない。

どうしよう……このままじゃ勝ち目が無いわ。

……

そうだっ！

ちよつと卑怯だけど……こうなったら！

「あ、玲さん」

「げっ！ まずいつ！ テスト前に遊んでるところ見つかったら——」

今だっ！

「なんてね。そんな手にはひっかからないよ」

「あつ……」

反撃されちゃった……。

「今日の姉さんは夜まで帰ってこないんだよ。それにその手は今まで散々雄二にやられてきたからね」

そういうこと……。

つまり坂本と同じ手を使ってもダメってことね。

それならまずは坂本の手口を聞き出さないといけないわね。

「じゃあ坂本って他にどんな手使うのよ」

「んー……。脇の下を突つついたり、僕のコントローラーの線引つ張ったり。技を出す直前にテレビの電源切ったりもしたね」

「アンタたちどれだけ卑怯なのよ……。テレビ消したら勝負にならないじゃない」

「大丈夫だよ。雄二が技を出すタイミングは分かるからね」

……勝てないはずね。

見えなくても戦えるってどういいうことよ。

わけ分かんないわ……。

……

でも、ウチは勝ちたい！

この子で勝ちたいっ！

この後も勝負を続け、ウチはいくつもの動揺を誘う言葉をアキに掛けてみた。でもどんな言葉にも全然動じないみたい。

いつものアキからは想像できないくらい落ち着いている。

「むっっ」

「諦めてキャラ変えたら？ そのキャラじゃ僕には勝てないって」

「いいのっ！ ウチはこの子で勝ちたいの！」

ウチは諦めずに挑み続けた。

でも何度繰り返しても返り討ち。

アキは余裕の笑顔でウチの攻撃に的確な反撃をしてくる。

もうっ！ 憎たらしいわね！

ウチがこんなに苦戦してるって言うのに！

「ホント容赦しないわね。初心者に対して」

「情けは人のためならずって言ってね、情けを掛けるとその人のためにならないんだよ」

「え？ アキ、それ意味違うわよ？」

「うん？ 今度はそういう作戦？ その手には乗らないよ」

「ううん本当よ？ そのことわざはね、情けをかけることは相手のためじゃなくて自分のためになることだから、誰にでも親切にしなさいって意味なのよ」

「ははっ。美波にしてはよく考えたね。でもそんなことじゃ僕は動揺しないよ」

「嘘じゃないわよ！ ウチが今朝勉強してて調べたんだから！ 嘘だと思ふなら見せてあげるわ！」

学年のはじめに学校で買った本の中に、ことわざ辞典があった。

ウチが今朝見たのはその辞典。

同学年は全員同じ辞典を買っているから、当然アキも持っているはず。

「学校で買った辞典があるでしょ？ ちよつと借りるわよ」

ウチは立ち上がって本棚に向かおうとした。

ところが――

「ちよつ！ ちよつと待つて美波！ いいよ自分で調べるから!!」

アキはそう叫ぶとウチの前に立ちはだかり、本棚に向かうのを阻止した。

何を慌ててるのかしら。

見られちゃ困るものでもあるって言うの？

「アキ、まさかいやらしい本なんかを隠してるんじゃない……」

「そ、そんなところには隠してないよ！」

「じゃあ他のところに隠してあるのね？」

「うぐっ……」

「凶星みたいね」

「そっ、そんなことより、ほらこれでしょ！　ことわざ辞典！　自分で調べるから美波は座って待っててよ！」

「まあいいわ。じゃ、調べてみなさい。ウチが正しいことが分かるから」
「わ、分かったよ」

アキは辞典のページをめくり、おぼつかない手つきで調べはじめた。

「ずいぶん綺麗な辞典ね。使つてない証拠よ」

「うっ……。き、気が散るからちよつと黙っててよ！」

「はいはいっ」

この間、ゲームは止めてある。

ウチはアキが調べている間に、この後どう戦うか戦略を練ることにした。

……前に土屋がこの子を使つてすごい連続技を出していたわね。

あれが決まれば勝機はあるはず。

確かあれはああやってこうやって……。

「……」

調べ終わったのか、アキは黙って辞典を閉じ、本棚に戻した。

「どうだった？」

「……美波の言うとおりだった」

「だから言ったでしょう？ 納得した？」

「ううっ……」

「さ、勝負再開よ」

part E

アキはウチの横に座るとコントローラーを握った。
よし、さつき考えたやり方で……。
？

「どうしたの？ アキ」

なんか急にアキの勢いが無くなったみたい。

「まさか美波にことわざを教えられるなんて……」

「なによそれ。どういう意味よ」

ウチが日本語を教えたことがそんなにショックだつて言うの？

失礼ね。

あ……隙あり。

「やつー！」

「あつ……し、しまったあつー！」

ウチはアキの隙を見逃さず連続技を叩き込み、初めて一戦目を先取した。
やっとなつてたわ。

もう一戦取ればウチの勝ちよ！

「ふふ……油断するアンタが悪いのよ」

「くっ……！　もう油断しないぞ！」

確かにこの後のアキは言う通り、さつきみたいな隙は見せなかった。

次の試合はあっさりアキに取られ、残るは最終戦。

悔しいけど立ち直ったアキには勝てる気がしないわ。

せつかく一戦取ったのに、このままじゃまた負けちゃう……。

やっばり勝つためにはアキに隙を作らせるしかないわね。

でも、もう何を言っても効きそうにないし……。

何か他にアキの気を逸らせる方法は……。

……

そうだっ！　あの手があつた！

あの手を使えば間違いなくアキは動揺するわ！

そう。ウチはアキの弱点をひとつ知っている。

あの時、偶然見つけた弱点。

その弱点を突けばアキは隙を見せるはず。

ただ、あれをやるには準備がいる。

と言っても何か物が必要というわけではなく、体ひとつで出来る。
よし、じゃあ早速……。

ウチはその準備のため、座ったままアキに体を寄せた。

その距離、約五センチ。

「うん？　今度は色仕掛け？　美波の色仕掛けなんて僕には効かないよ？」

「なっ!?!　そ、そんなことするわけないでしょ!!」

って、ウチが動揺してどうするのよ。

今負けるわけにはいかないんだから。

心を静めて……。落ち着くのよ……。

えっと……位置はこんなものかな。

「？」

視界の横に映ったアキは不思議そうな顔でウチの行動を見ていた。

まだウチの目的に気付いてないみたいね。

よしっ……。

ウチは狙いを定めて一度、頭を左右に振った。

「うひあっ!?!」

計画通りウチの髪の手先はアキの首筋を撫でた。

その瞬間、アキは悲鳴に近い声をあげて背筋を伸ばした。
今だっ!!

この隙にウチはさつき連続技を再び叩き込み、勝利を納めた。

「あつ……」

「やった！ ウチの勝ちっ！」

「わ、わざとやったな美波！ こんなはずないぞ！」

「でも勝ちも勝ちよ。ああスツキリしたっ」

「くっ……！ こんなことで僕が負けるなんて……。くっそお……」

「ふふ……でもちよつと卑怯だったかしらね」

「ん？ んー……。まあ、雄二に比べれば可愛いものかな」

「アンタたちもつと正々堂々と戦いなさいよ……」

ホント怖いわね。アキと坂本のやりとりって。

男同士の友達ってみんなこんな感じなのかな。

でもアキ、口では悔しそうなことを言ってるけど、顔はあんなに笑ってる。

どうしてこんなに楽しそうなんだろう。

負けて悔しくないのかな。

よく分からないわ……。

って……あれ？

やっと勝てたウチは、ようやく辺りを見る余裕ができた。

辺りを見渡すといつの間にか部屋の電灯が点いていて、窓の外は真つ暗だった。

もう日が暮れてるじゃない。

遊んでると時間が経つので早いよね。

アキ、いつの間にか電気点けたんだらう？

ゲームに熱中してて全然気付かなかったわ。

それに喉がカラカラ。ちよつと熱中し過ぎちやつたかな。

「アキ、お茶貰っていい？ 喉が渴いちゃつた」

「あ、うん。今入れるよ。そつちで待つてて」

☆

ウチらはゲームを終えてテーブルの前へ座つた。

それにしてもアキがあのことわざを間違つて覚えているとは思わなかつたな。

今朝この言葉を知つた時、アキの行動つてこの言葉の通りなんだつて思つたのに。

アキのこと、もつと理解できた気がしたのにな。

ちよつとがっかり。

でも、それじゃアキつてどうしてこんなに人の為に頑張るんだらう……？

ウチはそんなことを考えながら、得意げにゲームの攻略法を語るアキを眺めていた。

「ん、美波？　ちよつと疲れた？」

「あ……ううん平気。ちよつと考えごとしてた」

考えても答えなんか出るわけないわね。止めよう。

「あ、そうか。ゲームの話しばっかりじゃつまんないよね」

「ううん。そんなことないわ。でもアンタってホントにゲーム好きね」

「まあね。これだけは雄二にだって負けないよ」

「そんなの負けていいからテストで勝ってみせなさいよ」

「それは無理だね！」

「諦め早過ぎよ！」

まったく。アキったら……。

笑ってる場合じゃないわよ。

やっぱりもつと勉強させないといけないわね。

あ……。もうポットのお湯が無いみたい。

ふとポットに目をやると、お湯の残量メーターが底を打とうとしていた。

いつの間にかこんなに飲んでたのね。

うん……でももうちよつと飲みたいかな……。

……よし、お昼も御馳走になったし、これくらいはウチがやらないとね。

「お湯なくなつたみたいだからウチ、足してくるわね」

ウチは立ち上がってポットに手を掛けた。

するとアキも立ち上がり、ウチの手にその手を重ねてきた。

「僕がやるよ。美波はお客様さんなんだから座ってて」

ウチは思わず手を引つ込めた。

「う、うん。じゃあお願い……」

「うん」

アキはそれを気にする様子もなく微笑むと、ポットを手に部屋を出て行った。

……何を意識してるのよ。

手を繋いだことくらいあるじゃない……。

ウチはアキが触れた手の甲をじつと見つめた。

……

付き合いはじめてからアキはちよつと変わった。

ウチの表情の変化にとても敏感に反応するようになった。

それに加えて、ウチに悪態をつかなくなった。

以前は事あるごとに関節技を掛けていたから、毎日のように触れ合っていた。でも今のアキはウチに優しくしてくれる。

だからウチもちよつとのもので乱暴をしないと心に決めた。

自分の悪い癖だつて分かってたし、何よりアキに嫌われたくないから。

だから今は手を繋いだりはするけど、以前のように体で触れ合うことはほとんど無い。

そのせいか最近、ウチはアキに触れること自体を意識するようになってしまった。

……

アキの手……温かかったな……。

part F

一人になったアキの部屋はとても静かだった。

時計の針が時を刻む音だけが耳に入ってくる。

ウチはその針の動きをぼんやりと眺めながら、あの時のことを考えていた。アキと付き合いはじめて数日後のあの日のことを……。

あの日、ウチは話しがあると瑞希に呼び出された。

話しとはもちろんアキとの関係について。

きつとお弁当とアキの態度の変化で気付いたんだと思う。

ウチは瑞希の問いに対し、嘘は言えなかった。

だからアキとの関係を正直に答えた。

瑞希……。

涙は見せなかつたけど……今にも泣き出しそうだった……。

もし木下の叱咤しつたが無かつたらウチが逆の立場だったかもしれない。

逆の立場だったらウチは……我慢できたのかな……。

木下の『瑞希が告白すると言っていた』というのが嘘だったのはこの時わかった。理由はどうあれ、結果的にウチは瑞希を出し抜いたことになる。

だからウチはどんな非難も受ける覚悟を決めていた。

でも、瑞希はこのことを責めたりはしなかった。

そして自分が想いを寄せていたことを決して言わないようにと、ウチを固く口止めた。

知ればきつとアキは悩み、苦しむからと。

瑞希の真剣な訴えに気圧けおされ、ウチはその願いを聞き入れた。

……

ウチはあの約束をずっと守っている。

だからアキはこのことを知らない。

あの時は納得したつもりだった。

でも、心のどこかでずっと引つかかっていた……。

本当にこれで良かったのかな……瑞希……。

アキは……どうなんだろう。

もし瑞希と二人で同時に告白していたら……。

アキはどっちを選んだのかな……。

さつきは気にしなかったアキの言葉が脳裏を過った。

—— 美波の色仕掛けなんて僕には効かないよ ——

自らの体を見下ろしてみる。

女性ならば本来あるべき山はそこには無く、僅かな丘を携えるのみ。

……

瑞希はウチよりもずっと女の子らしくて……。

ウチみたいに意地っ張りでもなく、優しくて頭もいい……。

ウチは……何もかも瑞希には敵わない……。

それでもただひとつ、アキを想う気持ちだけは負けない。

そう思い続けてきたけど……。

やっぱり気持ちだけじゃダメなのかな……。

アキは一ヶ月前のあの約束を誠実に守ってくれている。

でも付き合いはじめてからの一ヶ月間でデートしたのは一度だけ。

確かにお互いの都合が付かなかったのはあるけど……。

どうしてかな……。

恋人の関係になれたのに……。

優しくしてくれるのに……。

ウチ……アキを遠く感じて……。

……

思い起こせば、今までウチはちよつとのことですぐに苛立ち、アキに乱暴を働いてきた。

アキが抵抗しないのをいいことに……。

そんな接し方をしてきたウチが好きだったなんて、気付く方がおかしい。

それでもこんなウチの告白にアキは……応えてくれた……。

……

もしかしてアキ……。

ウチを氣遣つて付き合つてくれているのかな……。

本当は……瑞希の方が——

「お待たせ」

！

突然後ろからアキの声が聞こえ、驚いて振り向いた。

一瞬アキの顔が見えたところで氣付いた。

今、ウチは目に涙を滲にじませている。

顔を見せればきつとアキはウチの暗い表情に気付いてしまう。

ウチはすぐに顔を前に戻して隠した。

「美波……？」

「……お、おかえりアキ」

精一杯平静を装って声を出したものの、ウチの声は震えていた。

どうして急にあの時のことを思い出したりしたんだろう。

アキの言葉がきつかけになったのか。

静まり返った部屋に一人でいたことで余計に考え込んでしまったのか。

どちらにしても今のウチの心は不安の渦中であり、それが顔に出てしまっている。

そしてその異変はアキに気付かれてしまった。

「美波、やつぱり変だよ？ どこか具合が悪いんじゃないの？ うちに来た時も顔が赤

いみたいだったし……」

この言い知れぬ不安に襲われている状態を具合が悪いというのなら、そうなのかもしれない。

でもこれは薬を飲んだり、寝れば治るようなものでもない。

これを治すには……聞くしかないと思う。

アキが本当はどう思っているのか。
もしそうなら……ウチは……。

part G

「ねえアキ……アキは……」

「うん？」

「………無理してウチと……付き合ってくれているの？」

ウチはテーブルに視線を落としたまま後ろのアキに問い掛けた。

「……それはどういうこと」

アキは一呼吸置いてから落ち着いた低い声を出した。

怒っているようにも感じた。

怖い。

アキが怒っているのが怖いわけじゃない。

真実を聞くのが怖い。

でも、こんな気持ちのままでは付き合ひ続けたくない。

ウチは込み上げる恐怖に耐えながら声を絞り出した。

「………本当は……もっと色気もあって優しい……瑞希みたいな子の方が——」

「美波！」

アキがウチの言葉を遮るように大きな声を上げた。

恐る恐る振り向くとアキはポットを手にしたまま、真剣な眼差しをウチに向けていた。

「さつき僕が言ったことを気にしてるんだね」

「……」

アキの目を見ていられなかった。

ウチはアキの問いに答えられず、顔を前に戻し俯うつむいた。

「確かにあれは本当のことだよ」

!!

背後から恐れていた言葉が放たれた。

息が止まり、全身に冷たい悪寒が走る。

「じゃあ……やっぱり……」

両膝に乗せて握った拳に力が入る。

やっぱり……本当は瑞希の方がいいんだ……。

ウチじゃ……ダメなんだ……。

針で刺されたような痛みが胸に走る。

目の前が真っ暗になり、絶望が心を覆っていく。

暗く、冷たい嫌な感覚が畳み掛けるように襲い来る。

「違うんだ美波」

暗闇の中でアキの声が聞こえた。

その声にウチは無性に苛立ちを覚え、半ば自棄やけになって声を荒げた。

「何が違うって言うのよ！ どうせウチは胸もペツタンコで色気なんか無いし！
に乱暴するし！ 瑞希みたいに優しくも——っ！」

その言葉の途中、何かが背中に覆い被さった。

きゅっ……

そんな音がした気がする。

突然訪れた冷たさとは違う感覚に驚き、目を見開くと……。

温かい二本の腕が、襟元をまるで護るかのように交差していた。

何かに覆われた背中からも温もりが伝わってくる。

……？

ア……キ……？

アキ……なの……？

「色気なんて関係無い。そんなの関係無くて……。僕にとって美波は……一番、大切なんだ」

耳元でアキの囁く声が聞こえる。

「それにね、美波が本当はとっても優しい女の子だってこと。僕は知ってるよ。……だって……。僕のことをあんなに心配してくれたじゃないか……」

アキはその言葉と同時にぎゅつと一層強く抱き締め、ウチはリボンに頬が押し当てられるのを感じた。

『あんなに』というのが何を差しているのかは分からない。

アキの一直線な行動に心配することは今まで何度もあったから。

だから分からない。

分からないけど……。

アキの気持ち伝わってくる。

触れるアキの体から、その想いが伝わってくる。

アキの優しい声がウチの絶望に満ちた心を包み込む。

アキの腕が、言葉が……。心が……。

温かい……。

——堪えていた涙が溢れた。

一番……大切……。

ウチが？

こんなウチを……？

一番大切……？

……

いいの？

ウチで……？

ウチ……傍にいて……いいの？

溜め込んでいた悲しみの涙は悦びの証へとその意味を変え、頬を伝った。

ウチは……。

ウチは……アキを……。

……信じて……なかつた……。

そしてそれは次第に懺悔の涙へと変わっていった。

「いぬ……なやい……」

心の底から謝った。

涙で声が震え、まともに発音できていなかった。

それでもありつただけの心を込めて謝った。

「謝るのは僕の方だ。無理しているのかって言われて、意地になっちゃって……」

アキは静かにそう言うとう腕を放した。

同時に背中を覆っていた温もりも消えた。

「酷いことを言ってしまった。本当にごめん」

そしてアキはウチの横で両手を付くと、深々と頭を下げた。

……きつとウチが泣いてるからアキは自分が悪いって思ってるんだ。

でもそれは違う。ウチが勝手に思い違いをしただけ。

アキは何も悪いことはしていない。

色気が無いことなんて自分でも分かってるし、アキの言葉も本心だと思う。

そんなこと前から分かった。

そんなのを気にして……。二人つきりの時間が足りないからって……。

アキの気持ちを疑ったウチが悪いんだ……。

「やめてアキ……。アキは悪くない」

笑わなくちや……。

笑顔を見せないとアキは勘違いしたままだ。

涙を止めなくちや。

ウチは袖で目を拭き、一度大きく深呼吸した。

そして精一杯の笑顔を作り、アキに向けた。

「ウチがちよつと勘違いしただけ。だから気にしないで」

頭を上げたアキはウチの様子を見ると、少し困ったように微笑んだ。

そして黙ってハンカチを取り出すと、ウチの涙で濡れた頬を拭ってくれた。

ウチは嬉しさと恥ずかしさで一杯になり、顔を伏せた。

落とした視線の先ではリボンを象ったアクセサリが蛍光灯に照らされ、静かに光を

放っている。

アキ……。ごめんなさい……。

ウチは心でそう呟き、胸元のアクセサリに手を添えた。

part H

アキはテーブルへポットを設置しながら言葉を続けた。

「実はね、僕はもうひとつ謝らなきゃいけないことがあるんだ」

その意外な言葉を不思議に思い、ウチは顔を上げた。

「実は僕、美波に嘘をついているんだ」

「嘘……？」

「うん。正直に言うよ。さっきの料理なんだけどさ……ごめん。新作って言うのは嘘なんだ。本当は何度か作ったことがあるんだ」

「そうなの？ 別にそんなのウチは気にしないけど……。でもどうしてそんな嘘を？」

「う……そ、それは……その……なんと言うか……」

素朴な疑問を投げ掛けると急にアキの声は小さくなり、口籠りはじめた。

気のせいか顔を少し赤らめ、頬を掻きながら言い辛そうにしている。

もしかして言いたくないことなのかな……。

「アキ、やっぱり言わなくていいわ。ウチはぜんぜん気にしてないから」

「……………いや。やっぱり美波に隠し事はしたくない」

そう言つてアキは意を決したような顔を見せた。

そして所々言葉を詰まらせながら、その理由を明かしてくれた。

「このところさ、補習とか雄二たちと勉強したりとかで美波と遊ばなくてさ……。だから今日は……。今日こそ、い、一緒に過ごしたいって、思つて……。でもなんて言つて誘えばいいのかわからなくて……。色々考えたんだけど、僕には料理のことしか思いつかなくてさ……。それで新作だつて嘘をついて……。ごめんよ……。あ、でも美波に喜んでらいたくて研究をしていたのは本当だよ」

それを言い終えると、アキは恥ずかしそうに俯いて黙り込んでしまった。

ウチはその明かしてくれた理由に言葉を失い、呆然とアキの赤い顔を見つめていた。

アキ……。それが理由……。なの？

嘘の苦手なアキが……。ウチを誘うために……？

……。嬉しい……。

……

そうなんだ……。

そうだったんだ……。

アキの気持ちは変わってなかったんだ。

一ヶ月前のあの時から変わってないんだ。
あの時、二人で交わした言葉。

『一緒にいたい』

この気持ちは、ずっと……変わってないんだ……。

だから今日のアキはあんなに嬉しそうな顔をしているんだ……。

昨日の帰りも。買い物の時も。

あんなに楽しそうな顔をしたのは……そういうことだったんだ……。

そんなこともウチは分かってなかったんだ……。

確かにこの一ヶ月間、二人つきりになれる時間はあまり無かった。

でもそれは皆との時間も大切にしているから。

分かってたはずなのに。

それなのに、ウチじゃダメだなんて思い込んで……。

ウチのバカ……。こんなに思ってくれている人を疑うなんて……。

……

そうだ。

あの時、瑞希にも言われたんだっただ……。

—— 途中で投げ出したりしたら私、絶対に許しませんからね

ごめん瑞希……。

ウチ、瑞希の気持ちも裏切るところだった……。

……うん。

ウチ、もう迷わない。

もうアキを疑ったりしない。アキを信じる！

自分の想いを信じる！

よしっ……。

もういつものウチに戻らなくちや。

あんまり落ち込んでいたらまたアキに心配かけちやうし。

でもその前にアキにちゃんと謝らなくちや。

さつきは気が動転してちやんと言えてなかつたし。

「ねえ（美波）（アキ）」

「あ、な、なに？」

……

同時に同じことを言わないでよ。

せっかく気合い入れたのに拍子抜けしちやっただじやない……。

「美波からいいよ」

「あ、ううん。アキから先に言つて」

「う、うん。それじゃあ……」

「えっと、僕が無理して付き合ってるんじゃないかって思ったのつてき、もしかして一緒に時間が少ないって感じたからなのかな」

「えっ……？ あつ、えっと……それはあの……その……う、うん……」

一瞬、アキの質問が理解できなかった。

それはアキがこんなにもウチが思っていたことそのものを聞いてくるなんて思っていなかったから。

拍子抜けしていたところに予想していなかった質問を受けたウチは狼狽^{うろた}え、返した返事は酷くしどろもどろだった。

「やっぱりそうだよね……。僕もずっと気になってたんだ。ごめん。僕のせいだ……補習とかいろいろあつてさ……」

「ううん。アキだけのせいじゃない。ウチだって家の都合とかあるし……」
「それは……そうかもしれないけど……」

そう言うときアキは顎に拳を当て、思案顔でテーブルに視線を落とした。さつきも真剣な顔をしていたけど、ちよつと怒ったような感じだった。

でも今は何かを一生懸命に考えている真剣な顔。

きつと、もつと一緒にいられる方法を考え出そうとしているんだと思う。それならウチも何か考えなくちゃ。

ウチら二人のことなんだから、アキだけに考えさせるわけにいかないわ。えつと……。

土曜の補習が無くなることはないだろうし、アキの補習室送りも急には治らないと思う。

まずはアキにもつと勉強させて補習室送りを少しでも減らすとして、それだけじゃ時間を作れそうにないから……。

そうね……。

いつもの帰りにウチの家に寄ってもらって、一緒にお夕飯を作るっていうのはどうかな。

これならウチもアキの料理を見て学べるし、葉月も喜ぶだろうし。

でもそれじゃ玲さんが困るわね。玲さんのご飯はアキが作っているんだし。

……それなら、いつそ玲さんもウチの家に来てもらって……。

つて、それじゃ家族ぐるみの同居生活じゃない。

……

それもいいかも……？

つて！ 待つて待つて！ 冷静になるのよ……！

えっと、他にもっと二人の時間を作るには……。

「……………」

そういえば今頃気付いたけど……。

今日のアキ、いつもと違う。

静かで、落ち着いてて……。

なんだろう。なんだか不思議な感じ。

あ……。

でも帰りに一緒に歩いてる時はこんな感じだったかも。

それじゃ、これが本来のアキなのかな。

皆と一緒にだとあんな風に騒いじやうのかな……？

ウチがそんな考えを巡らせていると、アキは顔を上げて予想外なことを言い出した。

「よしっ！　じゃあ今日はお詫びに美波の言うことをなんでも聞くよー！」

「え……？　お、お詫び!?　そ、そんな、お詫びなんていいわよ……」

「いや。そうしないと僕の気が済まないんだ。さ、なんでも言つてよ。技の練習台でもなんでもやるからさー！」

「そつ、そんなのいいつてば……。むしろお詫びしなきゃいけないのはウチの方なんだし……」

「お願いだ美波。僕に償いをさせてほしい」

アキはテーブルに両手をつけて肘を張り、とつても真剣な顔をしている。

この目……アキは本気だ。

でも……。

「そんなこと急に言われても……」

練習台つて言つたつて、ウチはもう乱暴しないつて決めたし……。

でもこの調子だと何か言わないと引つ込みそうにない感じね。

ホント、こういうことだけはバカみみたいに真面目なんだから。

しょうがない。何か簡単なことでもお願いしようかな。

そうね……。

……

やっぱりいきなり言われてもなかなか思いつかないものね。
なんでも言うことを……。

ウチの……望み？

練習台……。

……

うん。そうだ。

ウチは……。

ウチの望みは……。

part I

ウチの望みは……あの時からの願望。

アキが看病してくれたあの日。

熱と驚きで足が立たなかったあの時。

夢みたいだった……。

ううん。

あれから何度も夢に見た。

ずっと言えなかった、ウチの願望。

「えつと……それじゃあ……」

ウチ、もつとアキに触れたい。

もつと触れ合いたい。

それは、ウチから無理やり技を掛けたりとかじやなくて……。

あの時みたい……抱っこしてほしい……。

「……………」

「うん？ なんだい？」

でも……。

やっぱり抱っこをせがんだりしたら子供みたいよね……。こんなことお願いしたら変に思われるんじゃないのかな。そうよ。きつと子供みたいって笑われるわ……。

だから今まで恥ずかしくて言えなかつたんだし……。

「なんでもいいよ。僕にできることならね」

……

大丈夫……。アキなら……。きつと分かってくれる！

ウチは迷わないって決めたのよ！

勇気を出して言うのよ！

「あ、あのね、アキ」

「うん」

「ウ、ウチね、えつと、その………だつ、抱っこして……ほしい………な………つて………」

「へ？」

っ——！！

やっぱりダメっ！ 恥ずかしい！

「や、やつぱりいいっ！ 今のなしっ！ 忘れて！」

恥ずかしさで堪らなくなったウチは肩を窄め、頭を垂れて前髪で顔を隠した。顔が熱くなって、耳まで真っ赤になっているのが自分でも分かる。

だが、相手の耳に届いてしまった言葉は簡単には取り消せない。

きつとアキはウチのことを笑うと思う。

でも……。

ウチの気持ちを少しでも分かってくれるなら……。

そんな僅かな期待を込めて少しだけ目を上げ、アキの表情を確認してみた。

前髪越しに見たアキは薄く口を開け、意外だと言わんばかりの顔をしていた。

や、やつぱり変なんだ……。

あんな顔するってことは絶対変な子だって思ってるわ。

どうしよう……恥ずかしいこと言っちゃった……。

ウチは更に恥ずかしくなって再び顔を伏せた。

全身が熱くて、顔はもう火が吹き出そうなくらい熱くて、頭がクラクラする。

ウチの心の中では、この場から逃げ出したい気持ちかどんどん大きくなる。

その一方で、まだアキと一緒にいたいという気持ちも強く残っている。

二つの気持ちが頭の中でぐるぐると駆け回り、思考をかき乱す。

どうしよう……どうしよう……。

考えようとしても頭が混乱して何も考えられない。

ウチにできることは恥ずかしさに耐えながら座布団の上で身を縮めることだけだった。

あ……れ……？

そうしているうちにウチは不意に目眩のような感覚に襲われ、何かに吸い寄せられるかのように体を倒した。

ウチ……どうしたんだろう……。

のぼせちやつたのかな。

起きなくちや……。

体を起こそうとして気付いた。

肩をしつかりと支えるものがある。

なんだろう……？

疑問を感じながらぼんやりした頭で目を開けると……。

目の前にアキの着ていたシャツがあつた。

!?

驚きで意識がはつきりした。

でも何が起きているのか理解できなかつた。

ウチは体を少し振り、アキの胸——というより腕に鼻先を押し付けている。

わけが分からず目を白黒させていると、頭の上からアキの声が聞こえてきた。

でも、その声は嘲笑のようなバカにしたものでなく、どこか緊張したような、それでいて優しく、いたわるような声……。

「……これでもいい?」

えっ……?」

声のする方を見上げると、ほのかに頬を赤く染め、こわばった笑みを浮かべるアキの顔があつた。

「……笑つて……(ないの)……?」

アキに問い掛けたつもりだった。

考えていたこととは逆の事態にウチは状況を受け入れることができず、出した声は蚊

の鳴くような小さな声になっていた。

「ん？ 笑え？ あ、そんなに緊張するなつてことか。そ、そう言われてもな……それじゃあ、えつと……」

えっ？ な、何を言っているの？

ますます混乱しているウチを余所にアキは宙を眺め、顔を顰^{しか}めている。

ウチは呆氣に取られ、ただアキの考える顔を眺めることしかできなかつた。

……

何を考えているのかな……。

数秒程度なのか、数分なのか。

どのくらいの間アキの顔を眺めていたのか分からないが、いつの間にかウチは思考力を取り戻し、そんなことを考えられるようになっていた。

そうしてようやく自分の置かれている状況も理解することができた。

ウチは体を後ろに倒している。

でも床に寝そべっているわけではなく、ウチの背中を支えるものがある。

……アキの腕だ。

その腕はウチの首を支えるように背中に回り、その先の手は肩に添えられている。そしてもう片方の腕は反対側から脇の後ろに回り、ウチの体を支えている。

ウチは……アキに介抱されるように……抱かれている……？

……

そっか……。

アキはウチのこんな子供みたいな願いを笑わずに黙って聞き入れてくれたんだ。

だからウチはこうして抱きかかえられているんだ。

やっぱり……アキは優しいな……。

あれ？

そういうえばアキ、『笑え？』とか言ってたような……？

あ……。

ウチ、さつきちゃんと声が出てなかったかもしれない。

だとしたら中途半端なウチの言葉を聞いて、アキは何か勘違いをしているかもしれない。

い。

きつとそうだ……。だからアキは考え込んでるんだ。

大変、言い直さなくちゃ。

「あ、あの——」

どう言い直せばいいのかなんて考えてなかった。

とにかく声を掛けてアキが考えるのを止めないと。

そう思つて声を出した。

でも遅かった。

ウチが言いかけた時、アキは何かを閃いたような顔を見せ、再びウチに顔を向けた。

そして――

「ごうかな」

笑顔を太陽のように……輝かせ……。

……

バカ……。

そうじゃなくて……。

……

やっぱり……アキはアキだ。

ホント……アキは……。

……

あつたかい。

あつたかいな……アキって……。

「美波？ えつと……なんか違った？」

「あ……。ううん」

うん。何も違うことなんてない。

やつと……夢が叶った。

ウチ、一度でいいから、思いっきりアキに甘えてみたかった。

……そう。こんな風に……。

ウチはアキの腕の中でうずくま蹲るように背を丸めた。

そしてアキの胸に顔を強く押し当て、何度も首を振って擦り付けた。

「ちよつ、み、みなつ、く、くすぐりたいよ」

「なんでもするって言ったじゃない。いいでしょ。これくらい」

「そ、そうだけど……く……」

ああ……アキの匂い。

この感じ。久しぶり。

こうしていると落ち着く。

ウチの家のリビングで一緒に寝た時の安心感。

あの時と同じ感じ。

……うん。

もっと深く……。包み込んでくれる感じ……。

「ありがとアキ……。ウチがいいって言うまで……。こうして……」

「ん？ ああ、うん。お安い御用さ」

安請け合いしちやって。

それならずつとこのままでもらおうかな。

ふふ……

【後編】

part A

『――！！』

「ん……」

人の話し声のような音が耳に入り、ウチは眠りから覚めた。

「あれ……ウチ……？ そっか、眠っちゃったんだ……」

ウチ、床に突っ伏して寝ていたみたい。

でもおかしいな。確かアキに抱っこしてもらっていたはず……。

アキはどこに行っただろう？

ウチは起き上がり、部屋を見渡してアキの姿を探した。

……

でも見渡しても部屋の中にアキの姿は無かった。

「アキ……？」

その呼び掛けにも返事は無かった。

でも今のってアキの声よね？

どこにいるんだろう……。

耳を澄ますと、隣の部屋からさっきの二つの声が聞こえてきた。

二人の声は何か言い争っているような感じがする。

片方はアキの声。

もう片方は女の人の声で——玲さん？

玲さん帰ってきたのね。

やっぱり二人は言い争ってるみたい。

またアキが何か悪さでもしたのかな。

ウチは隣の部屋から聞こえてくる声に聞き耳を立てた。

『さあアキくん。美波さんに何をしていたのか説明してもらえますか？』

『ねっ、姉さん！ だから理由を聞く前に殴らないでよ！』

『問答無用です』

『今説明しろって言ったじゃないかあつ！ 聞く気なんて無いんだろ！』

『いいえ。聞く気はあります。ただ、嘘を言えば許さないだけです』

『どうせ何を言っても信じないくせ……あつ、ご、ごめんなさい……ごめんなさい……』

！ 説明します！ 説明するから殴るのをやめてっ！』

『折檻を受けながらも説明はできますよね？』

『許すつもりだったく無いじゃないかーっ!』

聞こえてくる打撲音が変わった。

『あつ……言いますっ! 言いますっ! だからグーとパーで交互に殴らないで! なんかつても屈辱的だから!』

『わがままですねアキくんは。仕方ありません。ではパーだけにしておきます』

『いや……できれば殴らずに聞いてほしいんですけど……』

『口答えるのはこの口ですか?』

『ごひんははい! ごひんははい!』

『正直に答えれば私も怒りません』

『わ、分かったよ……正直に言うからさ、お願いだから殴らずに聞いてよ……』

『はあ……しょうのない子ですね。分かりました。では待つてあげますから正直に答えなさい』

『う、うん……』

『えつと……ずつと研究してた新作料理をさ、誰かに試食してもらおうと思つたら、ちょうど都合がついたのが美波だけでさ……』

ちょうど都合がついて……嘘だらけじゃない。

やっぱり玲さんにウチらのこと説明してないのかな。

きつとそうね。だから正直に言えないのね……。

『あつ……いたつ……な、なんで殴るの姉さんっ!』

『私にアキくんの嘘が見抜けなと思いますか? アキくんは嘘を言う時に目が泳ぐのですよ』

『ご、ごめんなさいっ! ごめんなさいっ!』

玲さんにはアキの嘘が分かつてるみたい。

きつと、さっきのウチらを見てアキが何かしたと思ってるのね。

玲さん怒ってるみたい。

『姉さんが怖い』って言ったのはこういうことなのね……。

でもさっきのはウチがお願いしたことだし、アキのせいじゃないわ。

玲さんに説明しなくちゃ。

『美波に試食してもらったのは本当だよ……』

『……そのようですね。では続きを説明してください』

『う、うん……それで……えつと……』

ウチはアキの説明に耳を澄ませながら立ち上がった。

そして隣の部屋に向かおうと足を踏み出した時、予想外の言葉が耳に入ってきた。

『それで感想を聞いてたら……その……美波が『抱っこしてほしい』って言い出して

……』

なっ!?

ちよ、ちよっと！　なんで途中を省略するのよ！

これじゃウチがいきなり恥ずかしいことを言ってみたみたいじゃない！

ウチは堪らなくなって、全力で隣の部屋に向かって走った。

もちろんアキに訂正させるために。

すぐに隣の部屋の前まで着き、乱暴に扉を開けると――

「……言うとおりに抱っこしてあげたら気持ち良さそうに眠っちゃってさ……」

っくく!!

最悪の言葉が聞こえた。

part B

アキと玲さんはその部屋の真ん中で正座で向かい合っていた。

玲さんは突然開いた扉に驚いたのか、顔をこちらに向けて目を大きく見開いている。

そんな玲さんの隙を見たアキはその場から逃れ、助けを求めて駆け寄ってきた。

ただ……。

「アキの……」

「美波っ！ たっ、助けてっ！」

ちようどウチも勢いがついていたので——

「バカああああっ!!」

「ぐほあっ……!」

思わず渾身のラリアットをアキの喉元に決めてしまった。

アキは一回転しそうな勢いで後頭部から着地し、そのまま気を失った。

「なんてこと言ってるのよ！　ウチはいきなりそんなこと言ったりしてないでしょ！」
「って！　しまった！　やっちゃった！」

あ、あんまりいいタイミングだったから思わず手が……。

でっ、でも今のはアキが自分の恥ずかしいところだけ隠して言うのが悪いのよ！
だからウチは止めようとして……！

……そんな言い訳はダメよ。

もう乱暴しないって決めたじゃない……。

で、でも止めなかったら——あつ！　そんなこと悩んでる場合じゃないわ！

「ア、アキっ！　大丈夫!？」

慌てて声を掛けてみたが、アキは苦しそうに目を閉じたまま返事をしない。

ど、どうしよう……。

完全に気を失っちゃってる……。

「美波さん……?？」

「えっ!?　あつ、玲さん!?　あ、あのっ！　アア、アキの言ったことは本当は違くて！

そうじゃなくて……！　えつと……えつと……」

なんて説明すればいいのかな……。

アキの言ったことは全部嘘だって言うの？

でも途中を省略してはいるけどアキの言葉に嘘は無いし……。

つて！ そんなことよりアキが！

でも玲さんにもちゃんと説明しないと……！

でもアキが！

ああもうっ！ ウチ、どうしたらいいの!?

「美波さん、アキくんに脅されているのですか？」

「えっ……？ 脅され……つて？」

何？ ど、どうということなの？

ウチが脅されて？

玲さんの言っている意味が分からないわ……。

「美波さんがあんなことを言うなんて信じられません。もし本当に言ったのであれば、アキくんにか弱みを握られていて、そのように言うよう脅迫されたのではありませんか？」

「えっ!?! そつ、そんな！ 玲さん！ いくらなんでも酷いです！ アキがそんなことするわけないじゃないですか！ アキは本当に優しくして！ ウチのことを本当に思ってくれて！ だからウチはアキが大好きで！ だから一杯、一杯触れたくて！ それで

……！ それで……」

ウチ、何を言ってるんだらう……。

悲しくなってきた……。

恥ずかしい……。

アキへの気持ちをこんな形で言うことになるなんて……。

もつとちゃんと話したかった……。アキのバカ……。

「美波さん、顔を上げてください」

「……」

「美波さんは正直ですね。美波さん、人を好きになることは恥ずかしいことではありませんよ。むしろ素晴らしいことです」

玲さんの言葉で少しだけ落ち着いたウチは頭を上げた。

そのウチを見つめる玲さんはずっとも優しい笑顔を見せていた。

「美波さんの気持ちは以前から知っていました。確信したのはアキくんの看護を申し出た時ですけれどね。今のは妬けるのでちよつと意地悪をしただけです」

「えっ……？ そんなあ……玲さん酷いですよ……」

「ふふ……ごめんなさいね」

玲さんは倒れているアキに目を向けるとゆっくりと立ち上がり、歩み寄った。

そして両膝を突いて座ると、アキの頭を膝の上に乗せた。

「アキくんは私と話していても、美波さんのことになるととても楽しそうな顔をするのですよ」

玲さんはそう言いながら気を失っているアキの頭を撫でた。

目を細め、優しい視線を送りながら。

そういえばウチも葉月に言われたことがあったつけ。

アキの話しをしてみるとすつごく楽しそうだった。

アキもそうなんだ……。

「あ、あの……玲さん、ウチもいいですか？ その……ウチがやっちゃったわけだし

……」

「はい、どうぞ」

玲さんの許可を得たウチはアキの横に座り、手を伸ばして頬をそつと撫でた。

「ごめんね……アキ」

そう呟くと、心なしかアキの苦悶の表情が和らぎ、口元が緩んだような気がした。

この後、ウチは落ち着いて玲さんに事情を説明した。

あの日、ウチが想いを告白したこと。

アキが悩んだ末にそれに応えてくれたこと。

それから純粋な付き合いをしていること。

抱っこしてもらっていたことも、なんとか分かってもらえた。

「そうですか……。アキくんもようやく分かってくれたのですね」

玲さんはウチの話しを聞き終わると、そう言つて満足げな笑みを浮かべた。

どうやら玲さんはウチや瑞希の想いをずっと前から知っていたらしい。

今まで何も言わなかったのはアキに自分から気付いてほしかったからだと言う。

そういうえば木下も似たようなことを言っていたような気がする。

そういうものなのかな……。ウチにはよく分からないわ。

「う……………ん……………いてて……………」

あ、アキが目を覚ましたみたい。

「アキくん、気が付きましたか？」

「アキ、大丈夫？」

「あれ？ 姉さんと……………美波？ えつと……………僕、どうしたんだっけ？」

「記憶が混乱しているようですね。それでは姉さんの愛のチューで治療をしましょう」

「えっ!?! なっ、なにになに!?! どっ、どういふこと!?!」

アキが一瞬で部屋の隅に逃げ込んだ。

この間0.5秒。

身体はまったく問題ないみたいね。
すごい瞬発力だわ。

「大丈夫です。半分冗談です」

「半分の意味が分からないよ！」

アキと玲さんって、いつもこんな感じなのかな。

でもアキの反応っておもしろい。

玲さんがからかう気持ち分かるわ。ふふ……

そんなアキの反応に笑いを堪えていると、玲さんが耳元で囁いてきた。

(美波さん、苦勞も多いと思いますが、アキくんをよろしくお願いしますね)

(あ、はい……。こちらこそ……)

「ん？ 僕がなに？」

「ううん！ なんでもないっ！」

part C

「姉さん、ちょっと美波の話し相手をしててくれない？ 僕やることがあるからさ」

「分かりました。では美波さん、リビングに行きましようか。アキくん、お茶とポットをいただきますよ」

「うん。僕の部屋に置いてあるから持って行って」

「じゃあウチが持っていくわ」

ウチと玲さんはリビングに移動し、語らいの時間を過ごした。

お母さんや葉月、それと瑞希以外でこんな話し込んだ女の人なんて初めて。

玲さんの話しはとも興味深く、時間を忘れて聞き入ってしまった。

どれくらい時間が経っただろうか。

ウチはすっかりおしやべりに夢中になっていた。

そんな中、どこからか聞き慣れた電子音が聞こえてきた。

その音はリビングに入ってきたアキの手元から発せられていた。

「美波、携帯鳴ってるけど、どうする？」

「え？ あ、ホント。つて……ええっ!! もうこんな時間!? どうして教えてくれなかったのよ!」

「だって、あんまり楽しそうだったから邪魔しちや悪いかなって思ってたさ」

そっか、ウチがあんまり夢中になってたから遠慮したのね。

そんなの気にしなくていいのに。

でもどうしよう……この電話、きつとお母さんからだ。

なんて説明しよう……。

葉月に気付かれたからきつとアキの家にいるのはバレてるだろうし……。

いつそ電源切っちゃえば……!」

……ダメよ。そんなことしたら余計心配掛けちゃうわ。

ど、どうしよう……。

「美波？ 出ないの？ 僕が出ようか？」

「ちよ、ちよつと! なに出ようとしてるのよ! 貸しなさいっ!」

アキの手から携帯電話を奪い取って開いて見ると、そこに表示されているのはやっぱり自宅からの着信を示すものだった。

やっぱりお母さんだ……出るしかないのかな……。

ウチは携帯電話を手に対応に悩んだ。

後ろではアキが玲さんにマウントポジションを取られ、平手打ちを貰っている。

あの二人は相談できる状態じゃないわね……。

仕方なくウチは通話ボタンを押して耳に当てた。

「あ、お母さん？ ごめんなさい。連絡するのすっかり忘れちゃって」

「えっ、今？ えっと、それは……」

「あ……うん。そう……」

やっぱりお母さんにはアキの家に行っていることがバレていた。

でもお母さんの口ぶりからして葉月が言ったわけじゃなさそう。

それに怒ってるかと思っただけど、そんな様子も無かった。

「玲さんと話してたら遅くなっちゃって。あ、玲さんっていうのはアキのお姉さんで――」

――

「美波さん、私に電話を代わっていただけますか？」

「あ、お母さんちよつと待って。玲さんが話したいって」

ウチは携帯電話を玲さんに渡した。

玲さんいつの間横に来ていたんだろう？

そう思って後ろを見たら、アキが俯せに転がっていた。

なるほど……。もうお仕置きは終わっていたのね。

ウチは転がっているアキの元へ行き、背中に手を添えながら声を掛けた。

「アキ、大丈夫？ でもアンタが悪いのよ？ ウチの携帯を勝手に開こうとするからよ」

「うう……ごめんよう……」

「分かればいいのよ。それにしても玲さんも手加減なしね」

「ホントだよ。姉さん僕にだけ厳しいんだから……」

「でもそれだけアキにしつかりしてもらいたいわってことなんじゃないの？」

「いてて……そうなのかなあ……。僕をいじめて楽しんでるようにしか思えないんだけどなあ」

起き上がったアキは両頬を真つ赤に腫れ上がらせていた。

「とつても痛そうね……」。

「アキ、頬が真つ赤よ。冷やさないよ」

「ん。ああ大丈夫だよ。こんなのほつといても治るさ」

「ダメよ。ちゃんと手当てしないと。ちよつと待つてて」

ウチはポケットからハンカチを取り出しながら小走りで洗面所に向かった。

手早く洗面所でそれを水に浸して部屋に戻ろうとした時、そこに置かれている時計に目が行った。

その針はもう十時を指そうとしていた。

もう帰らないといけないわね……。

ウチ、なんで寝ちやっただらう。

せつかく二人の時間ができたのに……。

勿体ないことしちやっただな……。

ウチは後悔しつつ、急いで部屋に戻った。

「いい、いいよ美波。そんなことしなくたって」

「いいからじつとしてなさい。ほら手、降ろして」

「はい……」

頬に濡れたハンカチを当ててあげると、アキはちよつと痛そうに顔をしかめた。

「いて……て……」

「もうウチの携帯勝手に開いたりするんじゃないわよう？」

「はい……反省してます」

アキは両腕を垂らして項垂れ、反省した様子を見せている。

ちゃんと反省してるみたいね。

でも見られる前に取り上げて良かったわ。

まだ残してあるあのメール。見られたら恥ずかしいものね……。

そんなことを考えながらアキの頬に手を当てていると、玲さんの笑い声が耳に入っ

来た。

なんだか話しが弾んでいるみたい。

長引きそうね。

「美波、もういいよ」

「もう痛くない？」

「うん。おかげで痛みが引いたよ。ありがとう」

「う、うん」

付き合いはじめてからのアキは、この『ありがとう』をウチによく言うようになった。

この言葉を聞いていつも思っていた。

それには、その時話している内容とは別の意味も含まれているような……？

そんな気がしていた。

ウチの気のせいなのかな。

……

気のせいでもなんでもいいや。

ウチはこの言葉がとっても嬉しいから。

アキが喜んでくれてるって実感できるから。

もっと、もっとアキに喜んでもらいたい。

でも今日はもう帰らなくちゃ……。

これ以上遅くなるわけにいかないし。

アキとの一日もおしまいね……。

「ウチ、もう帰らなくちゃ。支度してくるね」

「……うん。家まで送るよ」

そんな顔しないでよ……。

帰り辛くなっちゃうじゃない……。

アキは寂しげに眉を寄せながら作り笑いを見せる。

そんなアキから目を逸らし、ウチは帰り支度をはじめた。

と言っても持って来たのはポシエットだけだから、それをアキの部屋から取ってくるだけ。

ポシエットを手にリビングに戻ると、玲さんはまだ電話で話していた。

玲さん楽しそう。

お母さんと気が合うのかな。

邪魔しちや悪いし……待ってた方がいいわね。

それにしても玲さん、とつても丁寧な話し方。

さすが大人の女性って感じね。

初めて話す人とはこんな風に話すものなのね。勉強になるわ。

「美波さん、今日はうちに泊まって行ってくださいね」

「あ、はい」

……………

泊まって……？

思わずアキに顔を向けた。

アキもまったく同時にウチに顔を向けていた。

「……………」

数秒間見つめ合った後、ウチらは同時に驚きの声を上げた。

「えええっ!?!」

「姉さん!?! 何を言ってるの! 美波は泊まるつもりなんて無かつたんだから用意なんかしてるわけじゃないじゃないか! 着替えとかさ! まさか姉さんの下着を貸そうっての? そんなのサイズが——むぐっ」

「アキ、そ何言ってるの! そういう問題じゃないでしょ! それからアンタ失礼よ!!」

あ、玲さんっ！ ど、どういふことなんですか!？」

アキの口を手で塞いで黙らせ、ウチは玲さんに食い下がった。

玲さんは片目を瞑って手の平をこちらに向けながらまだ電話で話している。

ちよつと待つて……といふことかな。

でも玲さん、お母さんとどんな話しをしたんだろう。

お母さん変なこと言つてなければいいんだけど……。

「美波さん、お母様が電話を代わつてほしいと」

「あ、はい」

「お母さん？ どういふことなの？」

「うん……うん……。なんだそういうこと……うん。分かつた」

「ふえっ!? なななに言つてるのよっ！ そつ、そんなことしないわよ！」

「う、うん、分かつた。明日の午前中に帰るから。それじゃ」

P i

「美波、お母さんなんだつて？」

「なななんでもない！ アキは気にしなくていいの！」

「ほえ？」

「お、お母さんつたら……。」

『しっかり彼に甘えてきなさい』だなんて……。

ウチがそんなに甘えたりするわけが……！

わけが……。

……

さつき思いつきり甘えてたわね……。

ウチって本当は甘えんぼなのかな……。

これじゃ葉月のこと言えないじゃない。

でもアキの抱っこ……。心地良かったなあ……。

またやつてもらいたいな……。

……！

ウチ何考えてるんだろう！

は、恥ずかしい……！

ウチは頭を激しく振って、頭に浮かんだアキの抱擁イメージをかき消した。

それでも恥ずかしさに熱くなった頭は治まらず、対処に困ったウチは俯いて指をもじ

もじと通わせた。

「？」

アキと玲さんは不思議そうにそんなウチの様子を眺めていた。

part D

ウチは玲さんの計らいで泊めてもらうことになった。

玲さんが言うには、今日は帰るにしても遅過ぎるし夜道も危ない。

だから今夜はここに泊まって、明日の午前中に玲さんが責任を持って送ると言うことらしい。

この件は、さっきの電話でお母さんに伝えてくれたそうだ。

確かに時刻は既に午後十時を回っている。

そう言えば夕食もまだだった。

ちようど玲さんも食事をしていなかったらしく、ウチらは三人で遅すぎる夕食を取ることにした。

と言つても、作るのはやっぱりアキ。

アキは昼間の材料の残りでパスタを作ってくれた。

そのパスタは手早く作ったわりに憎らしいくらい美味しかった。

ここまで腕を見せつけられるとさすがに悔しいわね……。

でも玲さんがアキに作らせるのも分かる気がするわ。

夜食とも言える夕食の後、アキと後片付けにキッチンへ入った。

玲さんは仕事の残りを片付ける言ってリビングを出て行った。

ウチは……特に片付けるものは無い。

アキはリビングで待つように言ってたけど……。

ご飯もご馳走になったし、泊めてもらうともなれば、やっぱり何か手伝いたい。

洗濯物くらいは手伝えるかな。

そう思ったウチは洗濯機の所へ向かった。

確か脱衣所にあつたはず。

その場所は前に来た時に廊下から見えたので分かっている。

……

脱衣所に入ったウチは唾然とした。

置いてあつた洗濯籠の中は空っぽで、辺りには衣類が綺麗に干してあつた。

これもやっぱりアキがやったのかな。

いつの間に洗濯したんだろう……。

さつきやることがあるって言ってたあの時かな？

い。
アキの食生活を見て甲斐性なしだなんて思ってたけど、そんなこと全然無いじゃない。

考えを改めないといけないわね。

仕方なくリビングに戻ると、仕事を終えた玲さんが戻って来ていた。そこで玲さんに勧められ、ウチはお風呂を借りた。

今いるのは玲さんの部屋。

この家でベッドがあるのはアキの部屋と玲さんの部屋。

ウチは玲さんと一緒に寝ることになった。

今は寝る前の髪のお手入れ。

玲さんがウチの髪に櫛を通してくれている。

「美波さん、綺麗な髪ですね」

「そ、そうですか？　ありがとうございます……」

「ええ。手入れも行き届いていて、とても綺麗ですよ」

そういえばアキも『綺麗』って言ってくれたことがあったっけ。

アキに褒められて嬉しかったなあ……。

あの後すぐ美春の邪魔が入っちゃったけどね。

「私のシャンプーで肌に合いましたか？」

「あつ、はい。とつてもしなやかでいい香りでした。あれつてどこで買ったんですか？」

「あれは通販で買ったものなんですよ。カタログ、見てみますか？」

「はいっ！ ぜひ！」

玲さんは部屋の隅のマガジンラックから通販雑誌を取り出すと、ページをめくつてその商品を教えてくれた。

でもその値段を見て仰天した。

「こ、こんなに高いの!？」

「こんな値段じゃウチには買えないわ……。」

「玲さん、こんな高級品、ウチなんかが使つちやつて良かったんですか？」

「ええ、構いませんよ。よろしければ一本さし上げましょうか？」

「えええつ!?! い、いいんですか!?!」

「はい。先程ちよつと意地悪をしたので、お詫びの印です」

「そんな……ウチはぜんぜん気にしてないですよ」

玲さんつて優しいな。

アキは怖がつてるけど、いいお姉さんじゃない。

ウチも見習わなくちゃ。

帰ったら葉月にもウチのシャンプー使わせてあげようかな。

この後、ウチと玲さんは寝ることも忘れて話し込んだ。

去年の始めにアキがしてくれしたこと。

ウチが風邪で寝込んだ時に看病してくれしたこと。

無理を言ってウチの家に泊めたこと。

色々なことを話した。

それに対して玲さんはアキの小さい頃の話しや、弱点なんかを話してくれた。

やっぱアキは昔から首筋が弱いみたい。

またいたずらしちやおうかな。

それと今度、勉強を教えてもらう約束もした。

もちろんアキも一緒にね。

やっぱ玲さんって素敵。

大人の魅力って感じね。

ウチもこんなお姉さんがほしいな……。

あ、でもアキと結婚したら本当にお姉さんになるのね。

アキと結婚……………か……………。

えへ……………。

「ところで美波さん」

「あ、はい？」

「アキくんのごことで何か困っていることはありませんか？」

「アキのこと……………ですか？」

「はい。お恥ずかしいことなのですが、アキくんの女の子の気持ちに対する鈍さは世界級とも言える程ですので……………何か困っていることがありますたらアドバイスを上げますよ」

「確かに前はぜんぜん気付いてくれなくて苛ついたことも多かったですけど……………」

でも告白してからのアキはよくウチを見てくれるようになったし……………。

相変わらず酷い勘違いをすることはあるけど、付き合いはじめたあの日からはウチを大切にしてくれる。

だから今、困っていることなんて……………。

……………

そうだ……………ひとつだけ。

困っているって程じゃないけど……。

「玲さん、あの……」

「はい、なんでしよう?」

「えつと……」

ちよつと恥ずかしいけど、玲さんなら……。

「アキはウチのことを大切にしてくれているんです。アキの行動からそれはとつてもよく分かるんですけど……でも、言ってくれなくて……」

「? 何をですか?」

「それは……その……」

……

ダメよ……。

やつぱりこんなことを玲さんに頼っちゃいけない気がする。

このことはウチとアキの二人で解決しなくちゃ……。

アキがあればから愛の言葉を口にしないのは、きっと何か理由があるはず。

それはウチに問題があるのかもしれない。

だとしたら、自分でその悪いところを見つけて直すように努力しないと。

そう思ったウチはこれ以上言えなかった。

「……やっぱいいいです。自分でなんとかします」

「美波さん……?」

そうよ。自分でなんとかするのよ!

今は何をどうしたらいいか分からないけど……。

ウチはぐつと唇を噛み締めた。

それは自ら解決するという、決意の印。

玲さんはそんなウチをしばらく不思議そうに眺めていた。

でもすぐに何かを悟ったような表情に変わり、謎の言葉を掛けてきた。

「なるほど……。そういうことですか。分かりました」

「えっ……?」

「美波さん、行きましょう」

「えっ? えっ? 行くって……? どこへですか?」

玲さんは立ち上がり、『任せなさい』と言わんばかりの笑顔でウチの手を引く。

ウチはわけが分からず、引かれるままに足を運んだ。

part E

「で」

「[?]」

「どうして二人とも僕の布団に入ってくるのかな……う？」

廊下で受けた玲さんからの指示は『アキを抱き枕にしなさい』。

ウチはその指示通り、アキの布団に潜り込んで腕に抱きついている。

「検証です」

そう答えを返す玲さんも反対側からアキの布団に入り込んでいます。

「……悪い予感しかしないけど一応聞いておくよ。なんの検証？」

「より良い眠りを得るための検証です」

「それと僕の布団に入ってくることにどんな関係が？」

「ヒトの睡眠は浅い眠りのレム睡眠と深い眠りのノンレム睡眠があり眠り始めるとまず

ノンレム睡眠状態が現れその後レム睡眠へと移りこれを一組として約九十分の間隔で

繰り返すことで構成さ——」

「姉さんストップ」

「どうしました？ アキくん」

「まったく分からないから結論だけ簡潔にお願いします……」

「美波さんからアキくんを抱き枕にするとよく眠れると伺いました。それは姉さんも確認しなければなりませんよね？」

「レムがどうかかぜんぜん関係無い気がするんだけど……それから——」

アキがくるりと顔をこちらに向けた。

「美波い……そういうこと姉さんに吹き込まないでよお……」

そう言いながらアキは眉を寄せ、心底困り果てたといった感じの顔を見せる。

「えっとその……つい……ね……あはは……」

さつき玲さんの部屋で話していた時、つい調子に乗って色々話しちやつたのよね。

ウチ、きつとすぐく緩んだ顔してたでしょうね。

今思うとちよつと恥ずかしいことも言ってたかも……。

「ああもうっ！ 二人とも出てよっ！ これじゃ寝られないじゃないか！」

アキは声を荒げてそう言うのと、ウチと玲さんを腕に付けたまま上半身を起こした。

「「……」」

きつとウチら、正面から見たらコアラの親子みたいな感じになつてると思う。

「放してよっ！」

アキは両腕を強引に引き抜き、ウチらは振りほどかれてしまった。

「アキくん、大人しくしなさい。暴れたら私達が寝られないではありませんか」

「いや……だからこれじゃ僕が寝られないんだってば……」

「そんな……姉さんは悲しいです。先程は美波さんを抱いていたのに姉さんはダメだなんで……しくしく」

両手で顔を覆い、涙声で言う玲さん。

でもその声はとでもわざとらしく、泣いているようには聞こえなかった。

これ、嘘泣きよね。

玲さんも抱っこしてほしいのかな。

それにしたって、いくらアキでもこんなあからさまな嘘泣きに引つ掛かるわけが——
「あわわわ……ね、姉さん泣かないでよ……これにはその……事情があつてさ……」

わけが……。

どうしてこんなのに引つ掛かるのよ！

顔を伏せて嘘泣きをする玲さんを前にして、アキは戸惑うばかり。

まったく……ホント単純なんだから。

でもこういうところ、アキらしいわね。

「事情とは何ですか？ 私にも言えないようなことなのですか？ 姉弟二人、今まで隠

し事をするともなく仲睦まじく暮らしてきたというのに……しくしく」

「いや、だからそれは……美波の……頼み……だから……」

「なぜ美波さんの頼みは聞けて、私はダメなのですか？」

えっ？ これって……もしかして玲さん——

「う……。それは……その……み、美波は僕の……（大切な）……（ゴニヨゴニヨ）……」

ウチが気付くのと同時に理由を言いはじめたアキ。

頭を垂れながら言い辛そうに口籠り、その声ははつきり聞こえない。

最後のところはもう消え入りそうなくらい小さな声だった。

でも、その言葉はウチの耳にはしっかりと届いた。

『彼女だから』って。

アキからこの言葉を聞くのって初めて。

よかった……。

ちやんとウチのこと彼女だって思ってくれてるんだ。

こういうこと全然言ってくれないから、すごく不安だったんだから……。

そうよね。ウチとアキは『彼女』と『彼氏』の関係になったのよね。

あの日を境に……ね。

でも結局、玲さんの力を貸してもらおう形になっちゃったな。

情けないなあウチ……。

「アキくん？ よく聞こえませんでしたので、もう一度言っていただけですか？」

「……」

やっぱり玲さんにはさっきの言葉が聞こえなかったみたい。

でもその問いにアキは俯いて肩を窄め、口を噤んで答えようとしなかった。

まだ玲さんがウチらの関係のことを知らないと思ってるのね。

アキ、すぐく困ってるみたい。

ちよつと可哀想になってきたし、もう教えてあげようかな。

「あのねアキ、ウチらが付き合ってること、さつき玲さんに言っちゃったんだけど……」

「ええっ!?! そつ、そうなの!?! それを早く——姉さんごめんなさい! ごめんな

さい——」

アキは叫びながらその場に蹲ると、枕で頭を隠した。

どうして謝るんだろう?!

「アキくん？ なぜ謝るのですか？」

「いやだつて……女の子と付き合ったりしたら……」

「私は『不純』な異性交遊を禁止したのですよ？ それともアキくんは不純な気持ちで美

波さんと付き合っているのですか？」

「むっ……」

玲さんの言葉を聞くと、それまで怯えた表情を見せていたアキは急に眉を吊り上げ、真剣な顔へと変わった。

そしてその手に拳を作りながら玲さんを睨みつけ――

「そんなわけあるもんか!! 僕は！ 純粹に！ 美波のことが好きなんだから!!」
 声を荒げ、怒鳴るようにそう言い放った。

「……………」

その言葉の後、アキは真剣な顔をしたまま固まった。

対する玲さんも目を丸くして固まっている。

不思議な感じだった。

アキの声が頭の中で木霊こだまのように何度も反響した。

それは聞き慣れない言葉。

でも、一番聞きたかった言葉。

予想外の事態にウチは頭が真っ白になり、ただ呆然とアキの横顔を眺めた。

「あ、っ……」

えっ？

アキの声でウチも我に返った。

「アキくん」

「しっ！ しまったああつ!! ぼぼぼ僕はなんて恥ずかしいことをーっ!!」

「よくできました」

「な、なに言ってるの姉さんっ！ あっ！ そういえば姉さん泣いてないじゃないか！

さては僕に言わせるために騙したんだな!! っ、今の嘘！ 嘘だから！」

「嘘なのですか？ アキくん」

「い、いや、嘘じゃ……無いけど……っであああっもうっ！ 僕のバカあっ！」

アキ……。

やっと……やっと聞けた。

やっとアキが言ってくれた。

そっか……。恥ずかしかったただけなんだ。

ウチのせいじゃなかったんだ。

アキって……こんなに恥ずかしがり屋だったんだ……。

いつの間にかウチの顔はすごい熱を発していた。

それはもうホットケーキが焼けそうなくらいに。

一ヶ月間。ずっと聞きたかった言葉をアキが言ってくれた。

嬉しくて。

そのことが嬉しくて。

嬉しくて堪らなくて……。

「つ——！」

ウチは衝動的にアキの腕をぐつと手繰り寄せ、腕を絡ませた。

「みっ!?! 美波っ!?!」

アキは頬を赤らめながら目を白黒させている。

ウチは強く腕を締め上げながら、純粹に……とても純粹に感じたことを言葉にしてアキに向けた。

「ウチも……好き……」

「ふえええ!?! いやあああのそのううふうああああ……」

ウチの言葉にアキは驚きの表情を見せ、意味不明の言葉を発する。

その顔は更に赤みを増し、頭からは湯気を立ち昇らせはじめた。

正直、自分でも驚いた。

以前の自分からは想像できないくらい素直にこの言葉が出せた。

一年半の間言い出せず、苦悩を重ねてきたこの一言を……。

「あら、妬けますね。姉さんだってアキくんのことをこんなにも愛しているのに」
玲さんもアキの腕に抱きついたりみたい。

「うう……やややめてよ二人ともお……」

アキはこれ以上無いくらいに顔を赤くしている。

首筋まで熟したトマトみたいに真っ赤。

そんな顔を見られたくないのか、アキは枕を取り、その真っ赤な顔を隠した。

アキつてこんな風に照れるんだ。

なんか可愛い。ふふ……

「も……もう勘弁してよ……。いいよ……二人が出てくれないなら僕が出るから……」

アキは赤い顔でそう言うと、立ち上がってベッドから降りようとした。

不思議なことに、なぜかこの時はいとも簡単にスルリと抜け出されてしまった。

逃がさないように腕を強く握っていたはずだったなのに。

「あつ——だ、ダメっ！」

ウチは咄嗟とっさにアキの足首を掴み、降りるのを阻止した——

「ふぎやっ！」

つもりだった。

足を掴まれたことに気付かなかったのか、アキはそのまま足を運ぼうとして勢いよくベッドから落ちてしまった。

それも顔面から……。

「なっ！ 何するんだよ美波！ 鼻を打っちゃったじゃないかっ！」

「ごっ……ごめんなき——っ!？」

ウチが頭を下げて謝まろうとすると、耳元を風が吹き抜けていった。

驚いてその風の行方を見ると、アキがベッドに頭から埋まって呻うめいていた。

「むぐ……ぐ……」

何?! 何が起きたの!?

どうしてアキが埋まってるの!?

「姉さんまで何するんだよ！」

アキは跳ね起きると玲さんに向かって叫んだ。

ああ、今のは玲さんが投げたのね。

なんて鋭くて見事な投げなのかしら……。

「アキくん。大人しくしないと姉さん投げますよ?」

「もう投げたじゃないかあつ！ くっそお！ 僕は負けないぞ！」

そう言いながら再びベッドを降りようとするアキ。

そうは行かないわ!

今度はウチがアキの後ろを取り、バックドロップでベッドに投げ込んでやった。

「今日は抱き枕になってもらうんだから！ 大人しくなさいアキっ！」

「い、嫌だっ！　なんで僕が枕扱いなんだよ！　僕にだって人権はあるんだぞ!!」

「なんでもするって言ったじゃない!」

「うっ……そつ、それはさっきので終わりだよ!」

「そうは行かないわ!　今日は言うことを聞いてもらおうよ!」

「い、嫌だあつ!」

アキの抵抗は続いた。

そんなアキをウチは玲さんと協力して投げまくった。

観念したと見せかけて逃げようとするアキをウチが投げる。

アキが動揺を誘う言葉を口にして、その隙に逃げようとしたところを玲さんが投げる。

こういうのを『千切っては投げ』って言うのかな。

ちよつと違う?

でもウチ、今すつごく楽しい。

やっぱりアキと遊んでいる時間が一番楽しい。

捕らえては投げ。フェイントで逃げようとするのを回り込み。

こんなことを何度繰り返し返しただろうか。

最後はウチと玲さんのツープラトンでアキはやつと観念した。

「ぜえっ……ぜえっ……わ、分かった……ぼつ、僕の……負け……も、もう……好きにして……」

そう言うときアキは目を回して気を失ってしまった。

「アキくん大人しくなりましたね。それじゃあ美波さん、寝ましょうか」
「はいっ」

ウチは玲さんと一緒にベッドで気を失っているアキに抱きついた。

ごめんねアキ。

だって、こんなチャンスは滅多に無いもの。

今夜はしっかり抱き枕になってもらうわよ。

part F

夜が白々と明け始めた頃。

小鳥の囀る声でウチは目を覚ました。

「……」

おかしい。

ショートカットの黒髪。

長い睫毛まつげに閉じた瞳。

目の前にあるのは女性特有の顔立ち。

アキつたらいつからこんな綺麗な顔になったのかしら。

なんてね、そんなはず無いわね。

これは玲さんよ。

体を起こして時計を見ると、針は六時ちよつと前を指していた。

カーテンの隙間からは朝日の柔らかな光が差し込んでいる。

窓の外からは先程目覚まし代わりになった雀たちの囀りが聞こえてくる。

ずいぶん早く目が覚めちゃったな。

まあ当然かもしれないわね。

だって昨日の夕方に一度寝ちやってるもの。

それにしてもアキはどこに行ったのかな。

あ……まさかウチ、アキを蹴り出しちゃった!?

葉月と一緒に寝るといつの間にか葉月が床で寝てることもあったし……!

ど、どうしよう……。

アキが床で寝てたらウチひとりでベッドに戻せるのかな。

昨日みたいに投げ込むわけにいかないし……。

それに毛布も無くて、寒くて風邪なんか引いたりしたら……。

そんなことを考えながら恐る恐るベッドの先の床を覗き込んでみた。

だがその床に恐れていた光景は無く、じゆうたんの上には何も転がっていなかった。

いない……。よかった……。

そうよね。

よく考えたら玲さんの体越しに蹴落とせるわけないじゃない。

ウチも落ち着きが足りないわね。

でもそれじゃアキ、どこへ行っただろう？

ベッドの上から辺りを見回してみるも、その姿は見当たらない。

ちゃんと抱き枕にしてたはずなのに……。いつの間に抜け出したのかしら。昨日あんなに抵抗してたし、どこか別の部屋で寝てるのかな。

それにしたつて、またウチが寝ている間にいなくなっちゃうなんて酷いじゃない。今度は逃がさないようにしつかり捕まえておかないといけないわね。

さて、どうしようかな。

玲さんはまだ寝てるし、また寝るには中途半端な時間。

それにもう十分寝たから眠気も無い。

うくん……。

そうだ。

朝ご飯の準備をしてあげよう。

結局昨日は二食もご馳走になっちゃったし、今度はウチの番よね。

できることなら材料もウチが用意したいところだけど……。

この時間じゃスーパ―もまだ開いてないし、お金も持ってきてないのよね。

今日は冷蔵庫にあるもので作らせてもらいましょ。

本当の恩返しは今度ウチの家に招待した時ね。

よし、そうと決まればまずは顔を洗つて。

ウチは玲さんを起こさないように静かにベッドを降り、部屋を出た。

えっと、ウチのポシエツトは——玲さんの部屋ね。

ポシエツトとリボンは玲さんの部屋に置いたままになっている。

昨日の夜、玲さんの部屋で寝る予定だったから。

ウチは玲さんの部屋に向かった。

そして部屋の前まで来てドアノブに手を掛けた時、ふと思った。

もしかしてアキ、ここで寝てるのかな？

じゃあノックしてから……。

トントン

……

数秒待ってみたが中から返事は無かった。

耳を済ませてみても物音はしない。

まあ寝てたら返事しないわよね。普通……。

ウチはそつと扉を開けて中を覗いてみた。

部屋の中を見渡してみると、そこは昨日の夜、ウチらが出た時の状態のままだった。

ベッドの上にも人がいる様子は無い。

ここにもいない……。

おかしいな。ホントにどこへ行ったんだろう。

昨日『ベッドは二つしかない』って言ってたからここだと思つたのに。

まさかもう起きて朝ご飯の支度をしてるとか？

……

うん。ここにもいないとなると、他に考えられない。

だとしたら急がなくちや。

またアキに作ってもらったりしたらウチの立場が無いもの。

ウチはベッドの枕元に置いておいたポシエットとりボンを手に取り、急ぎ部屋を出た。

☆

洗面所に移動したウチはお手入れをはじめた。

手早く顔を洗い、髪にブラシを入れる。

！

いけない。慌てて乱暴にブラシを入れちゃった。

髪が傷んじやう——って、あれ？

ブラシがぜんぜん引っ掛からない……？

それに髪がいつもより軽い感じ。

……そうだ。昨日、玲さんのシャンプーを借りたんだった。

きつとあのシャンプーのおかげね。ブラシの通りがすごくいい。

さすが高級品は違うわ……。

ウチは玲さんに感謝しながら髪をまとめ上げ、リボンでいつものポニーテールを作った。

よしっ。

……

少しは可愛くなったかな？

ウチは鏡の向こうの自分に向かって笑顔を作って見せた。

でも微笑み返す鏡の中のウチはいつも通り。

まあシャンプーが変わったくらいでそんなに変わるわけないわね。

って、こんなことしてる場合じゃなかった。急がなくちや。

ウチはキッチンへと向かった。

キッチンリビングを抜けた先にある。

そのキッチンに立つエプロン姿のアキを思い浮かべながら、ウチはリビングを通り抜けようとしていた。

でも、思っていた状況とはちよつと違った。

リビングに入つてキッチンの入り口に目をやると、そこは薄暗く、明かりが点いている様子もなかった。

おかしいな。電気も点けないで料理してるのかな。

……行つてみよう。

疑問を感じながら足を踏み出した瞬間、リビング内のあるものが目に留まった。

それはソファの上で盛り上がる見慣れないもの。

昨日はあんなもの無かつたような……。

なんだろう。あれ。

ま、まさかお化け……じゃ、ないわよね……？

目を凝らして良く見ると、その盛り上がりは毛布のようだった。

えっ？ まさか……。

忍び足で近付いてみると、その毛布は上下に静かに動いていた。

それと共に寝息によようなものも聞こえてくる。

間違いない。アキだ。

アキはソファの上で毛布に包まり、片隅からあどけない寝顔を覗かせている。
こんな所にいた……。

どうしてこんな所で寝てるのかしら。

……

よく寝てるわね。

こうして見ると葉月の寝顔にちよつと似てるかも。

無邪気な感じがね。ふふ……

でもちよつと寒そう。

このままじゃ風邪を引いちゃいそうね。

えつと……。確か玲さんの部屋に毛布があつたはず。

あれを持って来てあげよう。

ウチは玲さんの部屋へ引き返し、毛布を持ち出した。

うん。この毛布、暖かい。

これならアキも風邪を引かずに済みそうね。

ウチはリビングに戻り、この毛布をアキにそつと掛けてやった。

すると暖かさを感じたのか、アキが僅かに笑みを浮かべたように見えた。これで大丈夫ね。

さ、アキが寝ているうちに朝ご飯の支度をしちやいましてよ。

と意気込んでソファに背を向けた、その時――

「……むなみい……」

えっ？

後ろからアキの声が聞こえ、ウチは思わず振り向いた。

振り向いた先のアキの様子は先程と変わらず、心地良さそうな寝息を立てている。

寝言……かな？

ウチは再びソファに近寄り、膝を突いてアキの様子を伺ってみた。

「すう……すう……」

よく寝てる……。

やっぱり寝言だったみたいね。

……

アキ、ウチは『むなみ』じゃなくて『みなみ』よ。

彼女の名前くらいちゃんと発音しなさいよね。

なんてね。寝言じゃしょうがないか。ふふ……

……

(朝ご飯はウチに任せて)

起こさないように静かに眩き、ウチはキッチンへ向かった。

アキの頬に唇型のスタンプを残して。

part G

ウチは鼻歌交じりに朝ご飯の支度を進めていた。

「うう……おはよう美波い」

準備をはじめて二十分くらい経った頃だろうか。

呻くうめような挨拶と共にアキがキッチンに入ってきた。

「あ、おはよアキ。もう起きたの？ まだ寝ても良かったのに」

「僕もまだ寝ていたかったんだけどね……。お客さんにご飯作らせたらダメだって姉さんに叩き起こされたんだよ」

「そんなの気にしなくていいのに」

「いやあ。確かに姉さんの言うとおりでよ。朝食は僕が作るよ。と言ってもこんな頭じゃ何か失敗しそうだし……。美波も手を貸してくれる？」

「いいわよ。でもウチが手伝うんじゃないかってアキが手伝うのよ。今回はウチが作るって決めたんだから」

「ああ、うん。分かった。それでいい……。よ……。ふあ……。あ……。……顔洗ってくる」

そう言うのとアキは寝癖の付いた髪を掻きながら洗面所の方へ消えて行った。

すごい寝ぼけた顔してるわね……。

眠れなかったのかな。

ウチはよく眠れたんだけどな。

もう覚えてないけど、なんかいい夢を見た気もするし。

あ……。

もしかしてウチ、やっぱり寝ている間に蹴飛ばしちやっただのかな。

それで眠れなかったからソファなんかで寝てたのかな？

だとしたら謝っておかないといけないわね……。

程なくして戻ってきたアキは朝ご飯の準備の手伝いを始めた。

後ろ髪をピンと立てたままで。

アキったら寝癖に気付いてないのね。

面白いからこのまま言わないでおこう。ふふ……

「うー……。冷めたい水で顔を洗ってきたのにまだ眠いなあ……」

「大丈夫？ アキ」

「これが大丈夫に見えるなら美波は眼科に行ったほうがいいかもね」

そう言うアキの^{まぶた}瞼は半分下がっていて、目の下には『くま』を作っている。

どう見ても大丈夫じゃなさそうね。
やっぱりウチのせいなのかな……。

「ね、ねえアキ、もしかしてウチ、寝ている間に蹴飛ばしちやったり……した？」
「うん？ そんなことは無かったと思うけど？」

「ホントに？」

「うん。なんでそんなこと聞くのさ」

「ううん！ 特に意味は無いのよ！ ただなんとなく、ね」
「？」

どうも違うみたいね。よかった。

でもそれじゃあ、どうしてこんなに眠そうなのかな。

「それにしてもアキ、ずいぶん眠そうだけど、眠れなかったの？」

「ああ……。眠れなかったよ。眠れるわけじゃないじゃないか……」

「どうしてよ。ウチはよく眠れたわよ？」

「どうしてって……。どうして美波は平気なんだよ。僕は緊張しちやって眠れやしな
かったよ」

「緊張？」

「うん。美波はしないの？」

「ウチは緊張なんかしないわよ？ どちらかと言うと安心するって感じかな」

「緊張したのは僕だけなのか……はあ」

「それよりいつの間にもベッドを抜け出したのよ。それにまたソファなんかで寝てるし」

「明け方だよ。明け方になってやっと抜け出せたんだよ。でも抜け出したのはいいけど他に寝る場所が無くてさ。姉さんのベッドで寝るわけにもいかない……し……ふあ

……ああ……」

大きなあくび。こんな状態で火を扱って大丈夫かしら。

「うう……それにまだ体がギクシヤクするよ」

そう言いながらアキは頭を左右に揺らし、肩や首をコキコキと鳴らしている。

うん。

それはきつと昨日ウチらが投げまくったからね……。

「ご、ごめんねアキ。昨日はちよつと無茶し過ぎちゃったかな」

「ホント無茶し過ぎだよ……姉さんまで一緒になつてさ」

「だって……アキが抵抗するんだもん」

「そりゃ抵抗するよ。美波と一緒になんて寝られるわけじゃないじゃないか……」

「なによ。それじゃ、玲さんならいいとも言おうの？」

「いや、そうじゃなくて……」

「それならどうしてよ」

「だからそれは……ドキドキしちゃって……」

「ウチの色仕掛けは効かないんじゃないかなかったっけ？」

「う……あ、あれはだつて色仕掛けというか……なんと言うか……」

「ふふ……」

あれ？　なんか……焦げ臭い？

つて！

「アキっ！　アンタ裾が燃えてるわよ！」

「ほえ？　おわあっ！　あちちいっ！」

いつの間にかアキの上着はガス台に触れていて、黒い煙を出していた。

でも燃えにくい素材だったのか、幸い焦げた匂いを発するだけで済んだ。

危なかったけど、おかげでアキの目が覚めたみたい。

この後のアキはすっかりいつもの調子を取り戻したようだった。

……寝癖を除いて。

まだ気付かないなんてね。

しようがないわね。

「アキ、アンタいいかげん寝癖直しなさいよ。ほら、ちょっと後ろ向いて」

「ん。んんんん」

アキはくるりと背を向けた。

ウチは手を水で濡らして、そのアキの髪を手ぐしで整えてやった。

……

あんまり意識したこと無かったけど、アキの背中って意外に大きいのね。

こうしていると、なんか大きな子供みたい。

ふふ……

「そういえばさ、さつき蹴飛ばしたとかなんとか言ってたけど、何かあった？」

「あ、うん……」

アキが野菜を切りながら後ろのウチに問い掛けてくる。

さつきウチが言ったことを気にしているのね。

アキは眠れなかったのは緊張してたからだって言ってたけど、さつきは寝ぼけてたみたいだし……。

やっぱりもう一回ちゃんと聞いてみよう。

ウチはアキの髪を整えてやりながら事情を話した。

「実はね、たまに葉月と一緒に寝ることがあるんだけど、朝起きると葉月が床で寝てたりするのよ。だからウチに蹴飛ばす癖があるのかなって。それで今朝もアキを蹴飛ばし

て眠れなくしちゃったのかなって思ってた……」

「ああなんだ、そういうことか。それなら心配ないよ。それは葉月ちゃんの寝相が悪いだけだからさ」

「えっ？ 葉月がつて……どうしてアンタがそんなこと知ってるのよ」

「あ……つと、いや、そんな気がしただけだよ。うん。きつとそうなんだよ」

「この口ぶり。怪しい……」

後ろを向いていて表情は確認できないけど、何か隠してるわね。

「アキ、答えなさい。どうして葉月の寝相なんか知ってるの？」

「どうしてって……いい、いいじゃないかそんなことどうだつてさ」

「いいから答えなさいっ！」

「わわっ！ 危ないって美波！ 包丁！ 包丁持つてるから！」

「えっ？ あ」

気付いたらウチはアキの背中にのしかかり、腕を首に回して締め上げようとしていた。

「そつ、そうね。さすがにこれは危ないわね」

「気をつけてよ美波。特に料理中はさ」

キッチンでの短気は禁物ね。

危うくアキに怪我をさせるところだったわ……。

ウチはアキの背中から降り、代わりに横から覗き込むように睨み付けた。

「これでいいでしょ？ さあさっきの葉月のこと、答えなさいよね」

「うくん……。仕方ない……。分かったよ。えつと、前に美波の家に泊めてもらったことがあったよね」

「そうね。忘れもしないわ」

「あの時、寝ようとしたら葉月ちゃんが入って来たんだよ。何度も自分の部屋に戻るよに言ったんだけど、一緒に寝るんだって言ってぜんぜん聞いてくれなくてさ。それで仕方なく——って、美波？　なんでそんな恐い顔してるの!？」

「アンタね……。葉月に手を出したりしたら承知しないわよ」

「わ、分かってるよ！　大丈夫、何もしてないから！　だからとにかく落ち着いて続きを聞いてー！」

「……。分かった。信じる」

「ふう……。そ、それでさ、とりあえず寝かしつけて、眠ったら葉月ちゃんの部屋に運んでやろうと思ったんだよ。したら葉月ちゃん寝返りが激しくてさ。ずいぶん蹴飛ばされたよ。その時に寝相が悪いってことを知ったってわけなんだ」

「……。そういうことだったのね」

そっか。

床で寝てたのはあの子の寝相が悪かったからなんだ。

それでアキはあの時もソファなんかで寝てたのね。

もう。葉月ったら……。

アキに迷惑掛けちゃダメって言うてるのに。

帰ったら叱ってやらないといけないわね。

……

でもそのおかげでアキと一緒に寝る口実ができたのよね。

ここは葉月に感謝するべきなのかな。

……ダメダメ。

やっぱりちゃんと叱るべきよ。

それとアキにも謝らなくちゃ。

「ごめんねアキ。葉月がまた迷惑掛けちゃったのね。帰ったら叱っておくわ」

「いや、いいよ。葉月ちゃんも別に悪気があったわけじゃないし。僕も気にしてないか

らさ」

「そうはいかないわよ。こういうことはしつかり言って聞かせないとあの子、調子に乗るから」

「うーん……。だからあんまり言いたくなかったんだよなあ」

「? どういうこと?」

「いや、これを話したら美波のことだからきつと葉月ちゃんを叱るだろうなって思ってた」

「当然よ。人に迷惑を掛けるようなことしたら叱らなくちゃ」

「僕は別に迷惑だつて思つてないんだけど……。やっぱり美波は厳しいな。なんかお母さんみたいだ」

「えっ? お母さん?」

「うん。前から思つてたんだよね。美波つて気が利いて、すぐく面倒見が良くて、でも怒るところはしつかり怒つて。きつといいお母さんになるだろうなってね」

「ウチが……お母さん……」

……

そ、それじゃ、お父さんはアキ……かな。

ここでウチは自分たちの状況に気付いた。

休日の朝。

キッチンの二人はご飯の支度。

そこでの話題は躰しつげの話し。

そう。これは未来の……。

ウチの夢見た、未来の姿……。

それでこの後は……。

できたスープの味見をしてもらって。

アキは笑顔で『おいしい』って言ってくれて。

幸せな時間……。

「うくん。でも美波はちよつと怒りっぽいところがあるかな」

「なっ!! そんなことないわよ! ウチだって少しは我慢できるようになったんだからね!」

「ほらほら、そうでもないみたいだよ? あははっ」

「あっ……。むっつ! アキのバカっ!」

ウチだって気にしてたんだから!

だからあれから気をつけようって——

「アキくん、お皿はこれでいいですか？」

あっ……。

「あ、姉さんありがとう。そこに置いてくれる？　つて、美波？　どうかした？」

「う、ううん！　なんでもないっ！」

そういえば玲さんがいるのを忘れてた。

すつかり二人っきりの気分だったわ……。

夢のような時間はここまでね。

この続きはまたいつか。

近い将来……。

夢じゃなくて現実で……ね。

「それにしても美波さんの仰しやる通りでしたね。私も昨晚はとてよく眠れました」

「姉さん!!　まさかこれからずっと僕を抱き枕の代わりにするつもりじゃないだろうね

!？」

近い将来なんて悠長なこと言つてられないかも……。

「いいえ。私はもう遠慮しておきます」

「ほっ……」

「つて、なんで美波まで安心してるのさ」

「だ、だって……。玲さんは毎日アキと一緒にいるわけだし……」

「安心してください美波さん。アキくんはもう私だけの物じゃありませんからね」
「姉さん……。僕を物扱いしないでよ……」

「そうだ。ちよつとからかつてやろう。」

「さっきの仕返しよ。ふふ……」

「じゃあウチと共有ですね！ ウチが左半分で、玲さんが右半分でいいですか？」

「ええいいですよ」

「えつ？ ちよつ、美波……。さん？ なんか僕の扱いおかしくない？」

「アキ、今度逃げ出したら罰として布団で『すまき』にしてサンドバッグよ」

「えええ！？ そ、そんなあ……」

「では次回はロープを用意しておきますね。美波さん」

「ええええつ！？ ね、姉さんまで冗談はやめてよ！」

「ふふつ。冗談よアキ」

「ああ……。なんだ冗談か……。もうそういうの勘弁してよ……」

「ふふ……」

「さっきのお返しよ。」

「これでおあいこね。」

でもやっぱりアキってからかうと面白いな。

「あら。冗談だったのですか？」

「——!？」

ウチはその声の主を見た瞬間、絶句した。

隣のアキも同じように言葉を失っていた。

それは真顔で問う玲さんの両手にはロープが握られていたから。

ど、どこから出したんだろう……？

取りに行ったようには見えなかったけど……。

「なんて。冗談ですよ。冗談」

「そ、そうだよねっ！ 冗談だよね姉さんっ！ あははっ……い！」

「そうよアキっ！ こんな冗談くらいすぐ分かりなさいよねっ……い！」

玲さんはにっこりと微笑んでいる。

……

冗談……よね？

その微笑む瞳の奥からは、殺気のような……妙な迫力が伝わってくる。

「……目が本気だ……」

ウチはアキと一緒に眩いた。

part H

朝食を終えたウチらはお母さんとの約束通り午前中のうちに帰るため、支度をはじめた。

ウチは着替えるだけだったのですぐに準備は終わった。

ところが同じく着替えるだけだったはずのアキがなかなか戻って来ない。

ウチは玲さんに言われ、そのアキを呼びに部屋に向かった。

あれ？ 扉が開けっぱなしじゃない。

いつもは閉まっているのに……。

扉が開いていることを多少の疑問を感じつつも、ウチはあまり気にせず部屋に入っ
た。

「アキ、入るわよ。玲さんがそろそろ行くこうって……あれ？」

漫画でも読んでいると思っていた。

でもそんな姿を思い浮かべながら入った部屋にアキの姿は無かった。

どこに行ったのかな……。

着替えでも取りに行ってるのかな？

昨日アキの服も脱衣所に干してあったし、きつとそうね。

しようがない。ここで待たせてもらいましょ。

すぐ戻ってくるでしょう。

ウチはベッドに腰掛けてアキの帰りを待った。

でも数分待つてみてもアキは戻ってこなかった。

遅いな……。何してるんだろう。

シャワーでも浴びてるのかな。

暇だったウチはそんなことを考えながら、何気なく部屋の中を見渡していた。

……

思っていたより整然としている部屋。

アキの部屋。

いつも見ていたアキから想像して、もつと散らかっていると思っていた。

だから初めてこの部屋に入った時、思っていたより綺麗に置いて意外だった。

そういえばこうしてアキの部屋をじっくり見るのって初めてかな。

何度か来てるけど、いつも瑞希たちと一緒にだったし。

部屋にはベッドや机、それに本棚がある。

置いてある物はウチの部屋とほとんど同じで、ぬいぐるみの代わりにゲーム機がある所が違うくらい。

机にはペン立てなどが置かれているが、埃ほこりをかぶっていて使われている様子はない。

やっぱり勉強してないのね。

まああの成績からして勉強してるわけないか。

その机の横にはの本棚があつて……？

？

なんだろう。

この本棚……何か違和感を覚える。

なんとなく気になったウチは本棚に近寄ってみた。

近くに寄ってみてその違和感の正体が分かった。

本棚には当然だけど本がぎっしり詰まっている。

問題はその本。

立てられている本の背表紙はカラフルなものからシックな色のものまで様々。

その高さも不揃いで、とても見栄えが悪い。

これは……。

漫画とゲームの本ね。それと……参考書？

なにもかもごちゃ混ぜじゃない。

整頓されているようでもよく見るといいかげんね。

しようがないなあ……。

よしっ。

暇だし、アキが戻ってくるまでちよつと整理してあげますか。

ウチ、こういうのは得意なのよね。

……

そういえば昨日、ウチが本棚を見ようとしたら必死に阻止してたわね。

……いやらしい本なんか出てきたら処分してやるんだから！

ウチは少し警戒しながら本棚の整理を始めた。

参考書は机に近い右側に。ゲーム関係や漫画は左側に。

本を抜いて同じ種類の本を探し、見つけてはその横の本と入れ換えて。

そんな作業を続けているうちにウチはパズルを解くような感覚になり、妙に楽しくなってきた。

ただ、よく見るとそれらの本は使われているものと、そうでないものはつきりと分かれていた。

漫画やゲーム関係の本はよく読むのか、折り目が付いていたり、汚れているものも多い。

それに対して参考書は開いた形跡もなく、伝票が差し込まれたままのものまである。はあ……。

観察処分者返上の道は険しいわね。

もつとウチが見てあげないとダメかなあ……。

楽しさの中のためにため息を交えながら整理を続け、半分くらい並び替えた頃だろうか。

本棚の真ん中の仕切り辺りにひとつだけ他と違う本があることに気付いた。

それはいやらしい本とかそういうものでなくて……。

背表紙は破け、薄汚れたみすぼらしい本……？

その背表紙には辛うじて古典という文字が書かれているのが見える。

これ、去年の教科書じゃない。

どうしてこんな物とっておいてあるんだろう。

しかもこんなポロポロなのを……。

一年の科目を復習するため？

まさかね。

アキがそんなことするなんて考えられない。

それができていたらもつと成績上がってるだろうし。

きつとアキのことだから、ここに入れておくことも忘れちゃってるのね。

汚いし、捨てちゃいましょう。

もし必要だつて言われたらウチのをあげればいいし。

!!

その教科書を抜き出して床に置いた瞬間、ウチは凍りついた。

え………？

突然目の前に現れた理解できない物。

普通に考えたらそこにあるはずのない物。

それが今、ここにある。

どういふ……こと……？

あの時の記憶が蘇る。

言葉が分からず、誰も相手にしてくれなかったあの時の記憶。

お父さんやお母さんに学校が楽しいと嘘をついていた時の記憶。

辛かったあの頃の記憶……。

ウチが今、こうして楽しい日々を過ごせるのはこの部屋の主のおかげ。

その主の部屋に保管されているウチの辛い記憶の象徴。

分からない。

確かにあの時、いつの間にか直っていた。

間違つて書いたはずの自分の名前が。

あの時、あの人が生懸命に言っていた言葉と笑顔が蘇る。

——ちゆうぬぶどればどぶにいるもなみ——

この言葉の意味が分かった時、最高の幸せを感じた。

あの時、ウチはあの人に惹かれはじめた。

何故これがここにあるのか。

分からない。分からないけど……。

きつと、あの人のことだから。

あのアキのことだから。

ウチの知らないところで何かをしてくれたに違いない。

きつと……。

ウチは全身の力が抜け、その場にへたり込んでしまった。

汚れた教科書を手に取ってみると、あの時からのアキと一緒にの毎日が脳裏を駆け巡る。

いつもバカなことをやっていた。

問題を起こしては先生に叱られて。

でもウチが困っていると、いつも近くにいてくれて。

心配してくれて……。

ただ、見当違いなことを言うことも多かった。

でもそれはアキなりに一生懸命に考えた結果で。

親身になって考えてくれた結果で……。

だからきつとこれも。

アキが一生懸命に考えた結果が、この教科書なんだと思う……。

「あれ？ 美波？ 何して——あつ！ それは!!」

教科書を手に呆然としていたウチは扉の方から聞こえたアキの声に正気を取り戻した。

でもその声のする方へ視線を送ってみるとそこにアキは姿はなく、ウチの手からは教科書が忽然とその姿を消していた。

不思議に思つて教科書の行方を探すと、ベッドの前で何かを後ろに隠すような仕草をするアキが目に入った。

「アキ……？？ それ……」

「わーっ!! なananんでもない！ なんにもないよ!」

慌てふためくアキは腕をばたばたと振り、この教科書の存在を必死に否定する。

この反応からして、この教科書に関する何かをやったのは想像するに容易い。たやす

知りたい。

アキが何をしたのか。

「アキ、教えて。どうしてそれがここにあるの？」

「い、いやっ……これはその……ええと……な、なんでかなあ？　そ、そうだ！　きつと雄二の作業だよ！　あいつがいたらずらで僕の本棚に入れたんだ！　きつとそうに違いない！　まったく雄二は子供だなあ。あはっはははっ……」

アキは嘘を言っている。

落ち着かない様子と視線を逸らす仕草を見て、ウチにもそれが分かった。

ウチは乾いた笑いで誤魔化すアキの目に真剣な眼差しを向けながら訴えかけた。

「アキ。そんな嘘で誤魔化さないで。ウチは真面目に聞いているの」

「う……ごめん……でもこれはちよつと……」

きつと知らないうちに恩を受けている。

ウチの直感がそう告げている。

どうしても知りたい。

アキが何をしたのか。

なぜ名前の欄に『島由美彼』と書かれた教科書がここにあるのか。

「お願いアキ。教えて」

「ど……どうしても言わなきゃダメ……？」

「言わなかったら一生追求するわ。明日から朝の挨拶は『おはよう、教科書』よ」

「わわわ分かった！　白状しますっ！　だからそんな変な挨拶にしないで！　ああもう

……恥ずかしいなあ……あんまり笑わないでよ……？」
ウチは黙って頷いた。

part I

アキは教科書を前に置いて置いて座り直すと去年の出来事を語りだした。

それはウチの知らぬ間にはじまり、すべてが終わっていた。

事の発端はつたんは今以上に一直線なアキの勘違い。

アキはその勘違いにより、当時犬猿の仲だった坂本と殴り合いの喧嘩をしたと言う。

それは木下や土屋を巻き込み、教室をめちやくちやにしての大喧嘩だったらしい。

その出来事を中心にあつたのが、このボロボロの教科書。

この破れた教科書を坂本が持っているのを見たアキは、坂本がウチを虐めているのだと勘違いしたと言う。

それが誤解と知らずに何度も坂本に殴り掛かり、その度に返り討ちにされた。

この時、坂本の喧嘩の実力を身をもって知ったそう。

その後、土屋の情報でその誤解は解けて。

代わりの教科書を求めて自転車で車を追いかけて。

傷だらけになって、最後には先生に叱られて……。

ホント……。アキは昔から変わらない。

こんな教科書ひとつを巡って周りを巻き込んで大騒ぎして。ほとんど開きもしなかった、こんな教科書のために……。

……

知らなかった。

アキがこんなことをしていたなんて。

この教科書のために、こんなにも苦勞をしていたなんて。

でも土屋の話しによれば教科書がこうなってしまったのは事故みたいなもの。

わざわざここまでしなくたって、ゆっくり、ありのままを話してくればウチにだって理解できたはず。

どうしてこんなことを——

……そうだった……。

あの時、ウチはアキの言葉なんて聞こうとしていなかった。

わけの分からない言葉でバカにされているなんて思い込んで……。

冷たく当たって……。

それでもアキは気に掛けてくれていたんだ。

こんなウチのために。

出会って間もない、友達なんて状態とは程遠かった、ウチなんかのために……。

バカはウチの方じゃない……。

ここまでしてくれた人を嫌っていたなんて……。

でもどうしてアキはこんなに一生懸命になつてくれるの？

それも言葉もほとんど通じなかつたウチのために……。

……

そうだ。今なら分かる。

どうしてアキが人のためにこんなにも頑張れるのか。

アキはウチと違つて素直なんだ。

ウチと違つて自分の気持ちに正直なんだ。

ただ、ちよつと不器用で……。

「——あの時は美波が虐められてるつて思つたら完全に頭に血が上つちやつてさ。ホント酷い勘違いだったよ」

思い込んだら一直線で……。

「だからもうあの時みたいな勘違いをしちやいけないって。あんな失敗をしちやいけないって思ってる。それを忘れないために、これをとっておいたんだ」

でも、とつても真面目で……。

「また同じような勘違いをしたら、また誰かを傷つけちゃうかもしれないからさ」とつても優しくして……。

「や、やっぱりおかしいよね。これがあつても僕の勘違いぜんぜん治ってないし……。如月ハイランドで美波がバカにされた時だつてカツとなつて殴り掛かろうとちやつたし……。あ、でもあれは勘違いじゃなかったかな」

ずっとウチのことを思ってくれていて……。

……

そんなアキが……ウチは好きで……。

……

大好きで……。

……

アキ……。

大好きなアキ……。

もつとよく顔を……見せてよ……。

アキの顔が……歪んで……見えないよ……。

胸が……熱いよ……苦しいよ……。

「ん？ 美波？」

「アキい……」

「どっ、どうしたの美波！ なんで泣いてるの!？」

「ごめ……ね……ウチ………ぜんぜん分かって………なかった……」

「へ？ なに？ なにが？」

胸が高鳴り、激しく締め付けられる。

止め処なく涙が溢れてくる。

色々な気持ちがちごちゃ混ぜになって頭の中をかき回す。

頭が真っ白になっていき、渦巻くように込み上げてくる様々な感情はウチの目から涙を溢れさせる。

感情の渦に翻弄され、わけが分からなくなってしまったウチはこれ以上何も言えず、ただその場で涙を流し続けることしかできなかった。

「あわわわ……み、美波、どうしたんだよ……。うう……。どうしよう……。なんかマズいこと言っちゃったかなあ……」

そんなウチの前にアキは慌てふためき、狼狽うろたえるばかり。

アキが心配している。

それは混乱した頭でも理解できた。

でも涙を止めようとしても、心を静めようとしても、まったく抑えが利かない。

ウチは何も出来ず座り込んで泣き続けた。

その前ではウチを宥なだめようとしているのか、アキが困惑した表情で両手をかざす。

こんな妙な膠着こうちやく状態が続いた。

そうしているうちにアキは突然頭を下げ、額を床に擦り付けて言い出した。

「ごめん美波っ！ 如月ハイランドのアイツらのことを思い出しちゃったんだよね？

ホント無神経でごめん！」

やっぱりアキはウチが泣いている理由が分かっていたいなかった。

あの時バカにされたことなんて、もうなんとも思っていない。
むしろ今では素敵な思い出の一部となっている。

この涙はそんなことが理由じゃない。

ただ、この理由はひとつではなく、いくつもある。

ひとつは、アキの気持ちに気付かなかった自分が情けなくて。

もうひとつは、アキがこんなにも一生懸命に思い、尽くしてくれたことが嬉しくて。

それから――

「違う……よ……アキ……」

「ほえ？ 違うの？」

アキは頭だけを上げると、さっぱり分からないといった感じの間の抜けた顔を見せた。

その呆けた顔とほを見たら……ウチは……愛いとしくて堪たらなくて……。

「っ――！」

「おわっ！ みっ、美波!？」

身を乗り出してアキの首筋に両腕を絡ませ……。

「大好き……だい……っ……き……」

頬をすり寄せて、声を絞り出した。

その言葉にウチの想いのすべてを込めて。

涙の一番の理由。

それは、アキのことがもつと、もつと大好きになつてしまつたから。

ウチは力いっぱい抱きつき、無我夢中で頬をすり寄せた。

苦しかった。

アキのことを考えると猛烈に胸が締め付けられ、息苦しかった。

でもアキのことしか考えられなかった。

こんなに苦しいのはきつと、もつとアキに触れたいからだ。

本能的にそう思つて、今までで一番強く抱き締めた。

これでもかと言うほど、強く、きつく抱き締めた。

それでも胸の切なさは治まらず、苦しきは増す一方だった。

「美波……」

こんなに強く締め上げているのにアキが苦しむ様子はなかった。きつとウチの力はいつもの半分も出ていなかったんだと思う。

「……（僕も）……」

アキが耳元で小さく囁き、その腕をそつとウチの背に添える。暖かい感覚が全身を包み込み、優しい声が耳に響く。

それは苦しむウチにとって追い打ちとなり、心は更に乱れを増した。

声の出なかつたウチは返事の代わりに更に腕に力を入れ、熱い涙をアキの頬や肩に落とす。

☆

どのくらいの時間こうしていただろうか。

いつしか涙は止まり、混乱した頭も元に戻りつつあった。

それでもまだ高ぶる感情は治まらず、ウチはただひたすらに抱きついていた。

アキもそれに応じるようにウチの背中を優しく包んでくれている。

「アキく——」

そんな時、扉の方から玲さんの声が聞こえた気がした。

その声にアキの体が一瞬、ビクツと震えたような気もした。

呼びに行つたはずウチが戻つてこないで様子を見に来たのかもしれない。

でもウチにはそれも気にならず、ひたすらに頬を寄せた。

ただ、この時には複雑に絡み合っていたウチの気持ちはひとつに束ねられていた。一生離れたくない。という、ひとつの気持ちに。

「えつと……美波、そろそろ放してくれない？」

「……イヤ」

「え……だ、だってお母さんとの約束もあるし、ずっとこのままってわけにも——」

「一生放さない」

「ええっ!? そ、そんな！ 僕に一生、美波を抱えて生活しろって言うの？」

「うん」

「い、いや……うんってそんな……こ、困ったな……」

自分のわがままは分かっている。

こんな状態のまままで生活なんて出来るわけがない。

それでも放したくなかった。

放したら遠くに行ってしまうような気がして。

だって、アキは誰にでも優しいから。

でも、確かにお母さんとの約束もある。

……しようがない。我慢しなくちや。

ウチは渋々、腕を解いた。

そうしたらやつぱり寂しさが込み上げてきた。

「ふう……」

ウチの腕から解放されたアキは軽く目を閉じ、安堵の表情を見せている。

……

隙ありっ。

「ありがとう、みな——っ！」

目を瞑っているアキに隙を見たウチは再び顔を寄せ、その唇を奪ってやった。

数秒間の唇同士の触れ合い。

我慢してあげるんだからこれくらい当然の権利よね。

「これで勘弁してあげる」

ウチは唇を離すと、そう言葉を掛けた。

でもアキはそれに反応しなかった。

まはた瞬きひとつせず、無表情でウチを見つめている。

おかしいな。もうウチのキスにも動じないのかな。

それはそれで寂しいな……。

そう思っていたらアキの顔はみるみる赤くなっていき、恥ずかしそうに目を背けた。なんだ。反応できなかったただけなのね。

よかった。ふふ……

ウチはその顔に満足して、立ち上がった。

「行こうアキ。玲さんが待ってるかも」

「う、うん……」

アキはそう言ったものの立ち上がろうせず、頬を赤く染めたまま目を逸らしている。「もう。しょうがないわね。ほら行くわよ」

ウチは強引にアキの手を取を引いて立ち上がらせ、部屋を出た。その手をぎゅっと握りながら。

part J

ウチはアキと玲さんに連れられ、帰路に就いた。

歩く道には冬特有の少し強めの風が吹き抜ける。

日は出ているものの、気温は低い。

日本に来て二回目の冬。

ドイツほど寒くはないけど、それでも頬を切るような風はとても冷たい。

去年の今頃はこんな冷たい風に震え、身を縮こませていた。

でも今のウチはそんなことちつとも気にならない。

この二日間でアキから貰った愛。

それをいっぱい、いっぱい胸に詰め込んでいるから。

去年の冬には無かった、こんなにも暖かく、こんなにも幸せな気持ちでいっぱいだから。

それにしてもこの二日間、アキにべったりだったな。

抱っこしてもらって、抱き枕にして。

それでさつきも……。

ウチ、どれだけアキにくつつきたいんだろう……。

……あ。そっか。

きつとこの一ヶ月間、足りなかったのってこれなんだ。

寂しさを感じたり、遠く感じたりしたのって、そういうことなんだ。

ウチ、ずっとこんな風にアキと触れ合いたかったんだ。

どうして忘れていたんだろう……。

これがずっと思い描いていたアキとの毎日だったはずじゃない。

そもそも今まで躊躇ためらっていた理由ってなんだっけ？

確かにもう乱暴しないって誓ったけど、それは触らない理由にはならないはずよね。

ウチが変に臆病になっちゃっただけなのかな。

……

よし。決めた。

明日からはもつとアキに触ろう。

ウチらは付き合ってるんだから遠慮する必要なんてないものね。

でも、だからと言ってずっとくつついてるわけにはいかないわね。

まだ須川たちはアキを狙ってるみたいだし、美春も諦めてないみたいだし……。

どうしようかな……。

「どうしたの？ 美波」

「えっ？」

アキに呼び掛けられてようやく気付いた。

並んで歩いていたはずなのに、ウチは二人より数歩遅れて歩いていた。いけない。いつの間にかこんなに遅れた。

「なんでもない。ちよつと考え事」

ウチは小走りに駆け寄り、アキに並んだ。

「考え事って？ 僕でよければ相談に乗るよ？」

「あ、ううん。いいの。ウチの問題だから」

「問題？ ああ、数学の問題とか？ それじゃ僕には無理だね。あははっ」

えつと……そうじゃないんだけどな。

アキったら相変わらずの勘違いね。

まあいいか。

考え事の内容を教えるわけにもいかないものね。

勉強ということにしておこうかな。

それにしても『相談に乗るよ』なんて、やっぱりアキは優しいな。

これくらい自然に愛の言葉もかけてくれると嬉しいんだけど……。

……

そうだ。この二日間で分かったこと、もうひとつあった。

ひとつは、ウチはもつとアキと触れたくて……もつと近くに感じたかったってこと。

それともうひとつ。

それはアキがものすごく恥ずかしがり屋だったこと。

嘘を言つてウチを誘つたのも。

愛の言葉を口にしないのも。

それは全部恥ずかしかったから。

いつもはバカ正直なアキでも、こういうことだけは素直じゃないんだ。

素直じゃないのはウチだけじゃなかったんだ。

なんか、ちよつと嬉しいかも。ふふ……

でもこういうのは素直に言えるようになってほしいな。

そうじゃないとウチもアキの思つてることが――

あ……。

そうだった。

ウチ、一カ月前のあの時に変わつちやダメって言つたんだった。

自分で言つたことと矛盾してゐるじゃない。

……やっぱりウチってわがままだなあ。
都合のいい時だけ変わってほしいだなんて……。

ウチは少し罪悪感を感じ、アキの顔色を伺うつもりで隣に視線を送ってみた。
ところがそこにアキの姿は無く、またさっきのように少し前を歩いていった。

あれ……。また遅れちゃってる。

考えながら歩くとすぐこうなっちゃうな……。

そう思いながらも、ウチはそのままぼんやりとアキの後ろ姿を眺めながら歩いた。

アキは玲さんと何やら話しをしている。

でも話している内容はぜんぜん耳に入って来ない。

それはまるで音声の無い無声映画のようで、アキの口の動きのみがウチの目に映って

いた。

……

ごめんねアキ。

やっぱりこれだけが変わってほしい。

だ、だってほら、人を好きになることは恥ずかしいことじゃないって玲さんも言っていたし。

ウチもその通りだと思し。

それにお互いが素直になればきっと、もっと素敵な毎日になると思うから。でもアキのことだから、ウチが言ってもあの時の約束をバカ真面目に守るんだろな。

急には変わらないというのものもあるだろうけど。

う〜ん……どうしよう。何かいい方法は……。

つと、いけない。

あんまり考え込んでも置いて行かれちゃう。

今考えるのはやめておこう。

このことは家に戻ってからゆっくり、ね。

ウチは二人に追いつこうと走り出そうとした。

でも足を踏み出した時、ふと目にしたもののが気になってその足を止めた。

気になるものとは、アキの左手。

その手は血色悪そうに少し白みがかかっていて、とつても冷たそうに見えた。

……アキ、手袋してないんだ。

ウチは自分の手に視線を移し、その手の平をじつと見つめてみた。

ウチの手も寒空の下ですっかり冷えてしまっている。

そういえばウチも手袋してないな。

……

よし……。

ウチは見ていた手に拳を作り、アキに視線を戻した。

そしてアキの手に目標を定めて駆け寄り――

「捕まえたっ！」

その手を両手で包み込んでやった。

「ん、美波？　つて！　ちよ、ちよつと美波っ……！」

アキは慌てた様子でウチと玲さんを交互に見ている。

玲さんの視線を気にしているみたい。

その玲さんはウチらの行動を見て微笑んでいる。

握ったアキの手は思った通り冷たかった。

ウチは体を寄せ、アキの手を片手に握り直して指を絡ませた。

冷えきったアキの手を暖めるつもりで。

うん。

いい方法を思いついた。

一緒に帰る時の条件を一個加えさせてもらおう。

その条件は……。

—— 一緒に歩く時は必ず手を繋ぐこと ——

これでウチは毎日アキを近くに感じる事ができる。

それに毎日こうしていれば、アキの恥ずかしいって気持ちも次第に薄れて行くと思
う。

早速明日の帰りからこの約束を入れさせてもらおう。

それで、いつか……。

アキが素直に言ってくれるようになったら……。

「アキ」

「うん？」

「Ich moechte mit dir alt werden」

「へ？ いっひめひ……なんだって？」

「あら。これはアキくん責任重大ですね」

「え、っ？ なに!? 責任ってなに!？」

「玲さん意味が分かるんですか!？」

「ええ分かりますよ」

「そつ、そうなん……ですか……」

しまった〜……。

まさか玲さんがドイツ語も分かるなんて思ってたわ……。

どうしよう……こんな聞かれちゃうなんて……。

「姉さん、なんて言ったのか僕にも教えてよ」

「あああ玲さんっ！ そ、それは——」

「アキくんが勉強不足だから分からないのですよ？ 知りたければ反省して勉強するこ

とです」

「ええ〜そんなあ……。いいよそれなら分からなくなつて……。なんだよ、姉さんのケ

チ」

「何か言いましたか？」

「いやなんにも！」

ああよかつた……。

玲さん教えるつもりは無いみたいね。

「美波、なんて言ったのか教えてよ」

「えっ!?」 だつ、ダメよ! 自分で勉強しなさいっ!」

「え〜……いいじゃんか教えてくれたってさあ……」

そんなの教えられるわけないじゃない。

分からないようにドイツ語で言ったんだから。

でも玲さんにはバレちゃったのよね。

あの様子ならアキに教えるなんてことは無いと思うけど……。

黙っててくれるわよね……?」

ウチはアキの体越しに玲さんの様子を伺ってみた。

すると玲さんはすぐにウチの視線に気付いたようで、にっこりと微笑みを向けてきた。

その笑顔にウチは愛想笑いを返すしかなかった。

だって、あんな言葉を聞かれて恥ずかしくなかったから。

いくら好きって気持ちは恥ずかしいことじゃないって言っても、これはさすがに恥ずかしいわ……。

……

でも――

「アキくん、早く一人前にならないといけませんね」

「へっ？ 一人前？ どういうこと？」

「内緒です」

「もう……なんだよさつきから責任とか一人前とかつてさ……。僕、なんか悪いことしたっけ？」

いいか。

アキは分かかってないみたいだし。

「「ふふ……」」

うん。

今はこれでいい。

それで……。

(アキが一人前になったら……)

「ん、なに？ 美波」

「ううん！ なんでもないっ！」

アキが一人前になって、責任が取れるようになったら……。

日本語で。

「アキ、早く責任取れるようになってね」

「だからその責任ってなんなのさ！」

「ふふ……なーいしよっ」